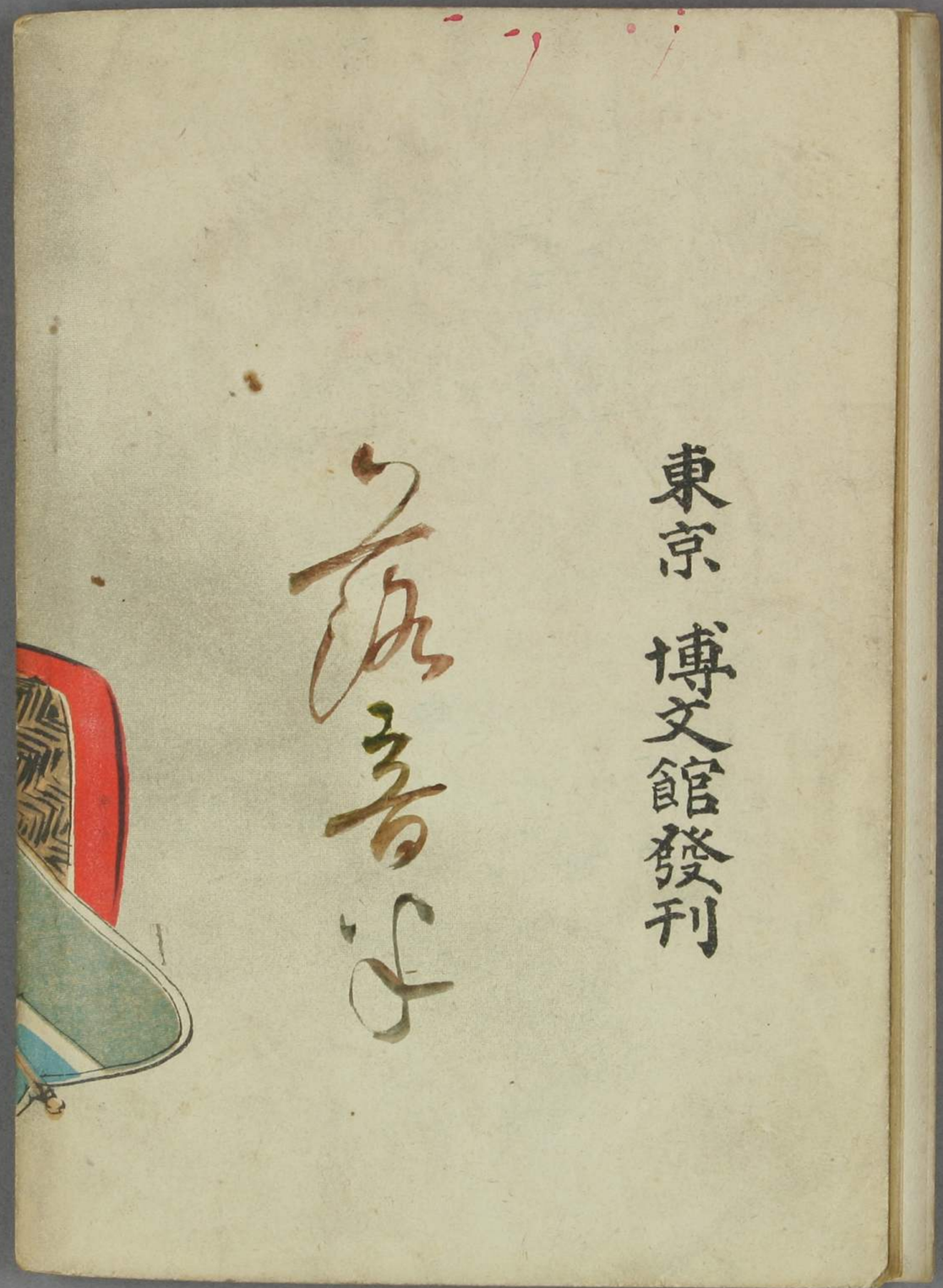
侞倖

袖珍小説第三編

幸田露伴作


東京 博文館發刊

清民高生
[illegible]
陵題

僥倖

幸田露伴

其上

足らぬほどの生活にせよ、家内に病人無くて、主人は主人だけに働き、女房は女房だけに身を持ちて行く世帶ならば、福はまづそれにて澤山、其上に正躰の得知れぬ運といふものゝ舞ひ來んで見えたら、人の詐謀の鉤の上を飾る香餌か、天の試驗の火の寓せられたる問題かと、よく〳〵用心してかゝらねば、大抵は愚にも釣られた魚となるか、悲くも燒かるべき罪あるものとなりて、思ひも

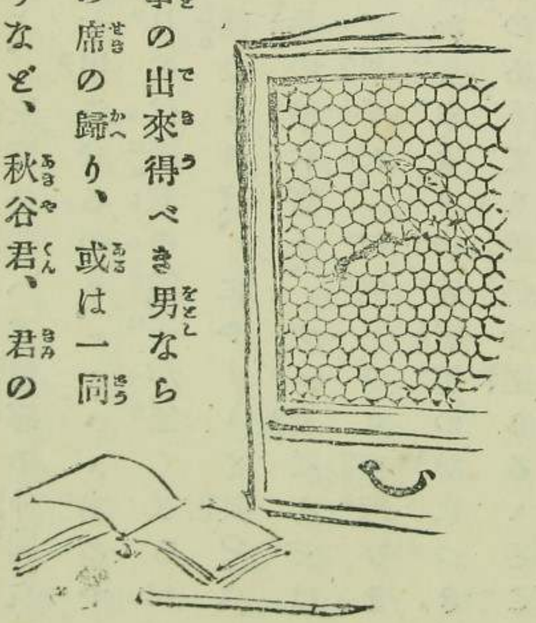
かけぬ憂目を見るべしと、日頃心學臭きことを得意にして語る老人あり、何處より聞き出し來りしかは知らねど、自己が説の誤謬ならぬ證據として、さま〳〵の人の身の上を語り、かゝる人はかゝる目に逢ひたり、然る人は然る目に逢ひたりなど例として談す譚も多きが中に、近來特に其老人が極めて熱心に極めて得意に語りあるく一條の譚は、おもふに其老人も多少關係のありしなるべしと猜せらるゝほど、左まで口功者ならぬ老人の口より、前後の事情光景を如何にも然ありしならんと誰人にも思はするまで、能く整頓ひて且能く周到りて語られぬ、

譚は私立銀行員なりし秋谷霜六といへる男の身の上についてのことなるが、霜六といへるは月給も三十圓ばかり取り、半季〳〵の賞與金も少からず受けて、富めるといふにはあらねど、妻のおたよ下婢のお直と三人限りの頭數少き一家なれば、まづ〳〵苦しからぬ生活を爲し、自分も外へ出づる時は黒の紋付の羽織を引掛け、安直ものながら高き帽子を冠る位のことは爲ることの成り、妻にも南部か節絲ほどの衣服ならば着せて出し得るといふ身柄なりし、

才は無けれど正直にて、事務の捌きの敏捷からぬ代り少

しくも怠惰を敢てせず、下役にこそ蔭では侮られ重役に對ひては陽ばかりならず誠實謹直なれば、誰にも甚だ重んぜられず又誰にも毫も憎まれずして年を經たる霜六は、到つて無事に日を送り日を迎へ、風にも雨にも朝は出勤の時を違へず、同僚等が小僧を走らせて近處の仕出屋安西洋料理屋より晝餐を取りても晝は必ず妻が調へ呉れて自己が携へ來りし辨當を食ひて冗費をなすと無く、退出の刻限には朋友さへ誘はずば、道すがら物を一つ買はんとも思はず眞直に家に歸りて、頓ての夕飯の膳の上の一陶を此上無き樂となし、飯終りては少し雜書など讀

めど、腹の皮の張りたるに眼の皮のたるみ來るを自ら抑制へんともせず、ぐづぐづと雪佛の潰ゆるやうに罪も無く寐て仕舞ふが日日定まつての事なりしが、



さりとて吝嗇などいふ事の出來得べき男ならねば新年宴會の八百松の席の歸り、或は一同へ賞與金の出し日の歸りなど、秋谷君、君のやうに妻君孝行の人も無い者だ、親へで無ければ幾干孝

行しても青銅五貫文米十俵乃至藍綬褒章なぞといふ者は政府から出ることは無いよ、交際ひ給へな僕等の仲間に、たまには好いよ妻君に角を出させるのも、ハ、ヽ君のやうに堅くばかりして居た日には談話の種子が無くなるだらうぜ、なぞと嘲弄半分誘はるれば、にや〳〵と笑つて、返辭より前にまづ相手の男の傍に寄り、ナニ妻なんぞは何樣でも好いさ、僕だつて男子だ、何處へでも交際ひまさ、と厭にもあらざるか元氣よき伊達者等の後につきて、電氣燈のありても月のありても提灯で送らるゝところ。艶消硝子へみよし野とか あだし野とか異な名の書か

れたる門洋燈の出たる家にも入りしことの無きにはあらず、されど然る席に臨みても自ら進んで口をきくべき術をも知らず他人もまた敢て霜六に與を發せしめんとも務めざれば、唯にや〳〵と笑ひつゝ人々の語るを聞き居り爲すを見居るのみにて、深く面白くも感ぜず、勿論復其處に足を向くることとも無く、翌日の霜六は相變らず昨日の霜六にて何時も平穏無事なりしさしも平穏無事なりし霜六が身にも變れば變ることの湧くものにて、運は何處より何處へ行くものか知れず。霜六或人の世話にて銀行に入りしより、此處を離れては別

に取出でゝ云ふべき材能も無き我身の立行くべきにあらずと、これだけは心弱き性質なれど身にしめて屹度覺悟なせるものから露怠らず勤めて、勤め續きし其第六年の正月、霜六年積つて三十三歳の事なりし、今日は事務初めといふ日、退出の刻となりて誰云ふとなく吾輩同士一小宴を張るべしとの議を云ひ出せしが、年の初のことなり初めて打揃ひしことなれば、異議無く談は纏まりて、退出すると其儘、誰にも便利好き地の某亭といへるに皆皆打寄りたり、もとより重役等は身柄違へばかゝる席へは來るべくもあらず、寄り合ひし役員等の中にては冬森

寒三といへるが上席にて次は春岡梅之助といひ、次は即ち秋谷なり、秋谷の次は夏山茂、其次は子日松藏丑山蒙助寅林斑兵衛などいへる輩、それより小僧上りの千代田千代平といへるに至るまで都合二十餘人、兎に角霜六も此座中にては三番目の位地なれば床近くに坐りて頭も自然高く端坐構へ居しに、酒猶盛んに行はれざる間、丑山蒙助といへるが、去冬僕は一寸自分で商法をして折角叔母から强請り取つたを殘らず失して仕舞つたが何でも今年は巧く遣つて好い年を越さねば承知ならぬと云ひ出せしを、大方君は慾張だから東様か定期でも扱つて失敗し

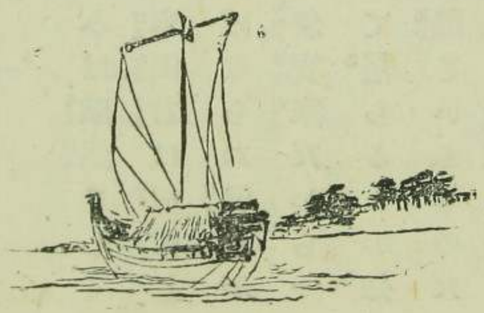
たのだらう馬鹿〳〵しいから廢し給へと寅林が調戯しより談起りて、盛んに金儲けの談合流行り、頓狂者の千代平は、私は資本さへあれば他の株は兎に角馬車株ならば屹度儲けて見せまする、其策如何と云ふならば嗚呼殘念だが無代で御話し致します、即ち先づ有る限りの資本を以て無暗矢鱈に賣りますね、而して豫め博勞を一人抱き込んで馬の虎列刺になつて居て猶症狀の明かでない奴を一匹賣りつけさせる、然らずんば虎的の吐瀉物を私に手を廻して馬車會社

の馬に御馳走致しますね、すると忽傳染します。馬又馬と傳染り傳染つて馬車馬殘らず死亡すれば會社は驚く、人々は虎車には乘り度無いと噂さしますね、そこでどんどん株は下がる、それ一攫千金とは此處のことでせう、嗚呼これほどの才子の僕を知る人なくして、今に猶月給十圓は是非も無いが、時々小僧と呼ばれるのは芸以て遺憾です、と云ひ出して滿座のものを哄然と笑はせ、年老いたる子日は眞面目くさく、僕の考案は千代平の考案のやうなものでは無い、最も確實に最も數理的に而して最も雄大な計畫だが、惜いかな恐らく餘り大過ぎるので遺

り遂げる人が無からうとおもふ、有りさへすれば屹度好いのだ他でも無いが日本中の立樹を殘らず山主や林主に懸合つて買ひ占めるのだ、而して其をば向ふ十年其儘居る置の約束を仕て置くのだ、木といふものは材は高いが立樹は安い、一國大抵大小平均五千萬圓と見れば實際よりも倍掛豫算だらうから保證つて好い、先づ三千萬圓で買占められる、實際ならば二千萬圓位なものだ、勿論幻術で拂ひ下げもするさ、五年山をとめれば其間の金利に輪をかけて材は騰貴する、それからは悠々と賣出せば好いさ、薄々聞けば僕の此の説を竊んで振舞はして歩いて居るものもあるさうだが怪しからぬこともあるものだと説き立て、一同を又絶倒させ、五十男の寅林は、諸君の御話は大仕掛過ぎて底到實際には行はれぬことゆゑ仕方がござりませぬ、それより小くても吾輩に出來得ることのほうが好いのです、僕の金儲の妙法は先づ兩替の小店を出します、而して扱ふ金銀貨を轆轤細工の器械のやうな器械にかけて知れぬやうに耳を削ります、鑪屑ほどの些少づゝの屑でも金銀のことで見れば侮れぬ金嵩となりまする、但し懲役になりますか否は法律の第何條に照すべきものかといふことが明瞭で無い以上は存じませぬから、

那位か試みに行て御覽じませ、して猶罪せられぬものと定れば私も行り出しますと沈着顏に陳べ終りて又一同を噴飯させけるが、上席の冬森は喞へし煙草を口より離して、ハヽヽ、何樣も君方のは皆滑稽だ、それより僕が好いことを聞かさう、諸君の中には知つて居る人もあらうが、こゝに一の富籤がある、マニラのやうな大袈裟なのでは無いが、一圓で一の當りが千圓取れ、二の當りが三百圓、三が百圓、それから以下段々と何でも總數五十本ばかりの當り籤があるのだ、興行人は横濱のブランディといふ英國人で東京の取次人は築地の舍利別といふ矢張

英人さ、中れば千圓、外れたところで一圓ばかり、一月の卷煙草の煙にもなる金さ、何樣だ諸君、運試しに札を買て見ぬか、既に僕の知つて居る相應な紳士に三百圓の中りを取つたものもあるのさ、唯の一圓だ、試して見て全で損したにしろ悔むにも當るまい、これよりほかに吾等が一寸金儲の法も無い、勿論甚だ覺束無いことではあるが、と云ひ出すに、いづれも慾氣滿々たる中にも丑山は乘り出して、僕は二枚だけ買ひますと云ひ、



夏山子日寅林等も賛成〳〵と云へば一坐誰も〳〵爭つて運試しをせんと力み立ちぬ

心弱き秋谷霜六と春岡梅之助との二人のみは默然として可否を云はねば、冬森は二人に打向ひ、春岡君は何樣したものだ、此樣いふとには兩手をあげねばならぬ筈だが今日は何として退却仕案だ、秋谷先生は着實家だから一圓でも無益に遣つて仕舞ふは損だと思つて居らるゝか知らぬが一同が賛成して居るのだから、交際といふものだ君一人異母子にならずともだらうと云へば、春岡は頭をかきながら、僕も賛成は賛成だが當時逼迫なので默つて

居た、秋谷君、君は貯金家だから何の造作も無いことだ、立替て置て呉れ給へ、而して君も連中に加入し給へと云ひ出でぬ、腹には好からぬことゝ思へど抵抗ひて衆人の云ふところを打消さんとの勇氣は無ければ、唯默々たりし秋谷霜六、あらずもがなの企圖には思へど如是云はれては辭み難く、宜うございます、承知しましたと弱〳〵と云へば、さあこれで滿場一致富籤案は通過したといふものだ、たしか明日が札の賣り出し日だと聞たから諸君それ思ひついた番號の札を千代平に托して買て來て貰つたが手數は省けて好い、其代り千代平が札の分は皆で分擔

して遣ることにしやうと冬森の立つる説また成立ちぬ
初夢に何を見たから僕は何番、イヤ僕は昨日の辻占に何
番大吉といふのを得たから其番號と各自當にならぬ當を
こしらゆる中には、薄覺えに覺えたる九星術幹枝術なん
どと恐ろしく考へ込むもありしが、兎に角一枚の紙に各
自が望みの番號は注され、現金は直に蒐められ、明日の
出仕は些遲くとも關はぬから干代平手抜なく望みの札を
買つて來いと事の始末は付けられたり、さあこれからは
前祝ひの酒だ、冬森君一つ頂きませう貴下の御顔が何だ
か中りさうに見えますぜといふもあれば、憚りながら僕

が中るよ、せめて僕にあやかつて二か三の中りでも得る
やうに一盃あげやう受け玉へと威張るもあり、君は中つ
たら如何するつもりだ、一人で仕舞ひ込むなぞは許さな
いよ、一同と共に日光か箱根の遊びをする位のことは爲
ねばならぬよと論ずるもあり、僕は中つたら直に株でも
扱つて猶其上の運を出して見せるといふもあり、そんな
慾張に中るものか、ナニ吃度中て見せると爭ふもあり、
彼處も此處も千圓といふ金子の明日でも取るゝやうな心
持せる人ばかりなるに、元氣よく酒も巡りて、埒無く衆
人醉ひ崩れたり

翌日千代平は首尾よくも注文通りの札を揃へて買ひ來りけるが是より各自は、中りて欲しや中りて欲しや、中らば此樣して彼樣しての空想に身を驅られて、多少はあれど誰も皆心の平和を失ひしは氣の毒にもまた馬鹿氣たりし、さて後一月餘りを經て千代平が手に興行者より當り籤の通知書來りたれば千代平これを報じけるに、發言人の冬森は先づ色を變へ、二枚買ひし丑山はァ、九星も頼みにならないと嘆じ、

僕は初夢を判じ損つた、僕は辻占に欺されたと喞つもあれば、ゑゝ燒の皮だ、こんな事だろうと思つたと瞋るもありしが、それではこれだけの人數の中に誰も中つたものがないのかと冬森の云ふ尾について、一座互に面を見合ひ少時無言となりしも可笑し、敏捷き千代平中り札の番號を繰り返し〳〵口の中にて云ひ居たりしが、あゝこの三百十八番といふのは私が買つた札の中に何でもあつたやうだ、ハテ誰のだつたか知らん慥に買つた覺えがあるが、春岡さんではありませんでしたかと云へば春岡膨れ面して、乃公のは五百十八番だ、といふ、ハテ何でも

買つたに違ひ無いが、ヤ秋谷さんのだ〳〵、少し下を向いて莞爾として居らつしやる、秋谷さん貴下中りましたねと指せば、中らぬ連中羨ましさと嫉ましさとに、眼を一齊にそゝぎかけて、秋谷が中つた、ナニ秋谷君ほんとに君が中つたか、そして何程のにあたつた、ヤア千圓のだと、ほんとに千圓のに中つたのかと口々騷がしく逼まり問へば、我が中つた嬉しさに他の中らぬ氣の毒さの交りたる不思議の心持に言語もしどろに聲も慄へながら、わ、わ、私が中りましたと漸く秋谷は返答したり

いよ〳〵秋谷が中つたるに定まれば、誰も誰も羨ましさ

の餘りの嫉さに、金といふものは意地惡く用の無いやうなところに行きたがるものだ、花も引かねば藝妓も買はぬ秋谷の寐惚面が千圓取つても何にするものか、大方銀行へでも預けるか家でも買ふ位なことだらうにと低い聲して誹るもの十人が六人七人までなり、中にも冬森は自己が發起して他の所得となりたるが一トしほ悔しくてか、秋谷君、君は大した運を得たものだ、此樣いふと何だか可笑いけれど言はゞ圖らず千圓といふ大金が君の手に入るのも元はと云へば僕はじめ衆人が勸めて進ぜたゝめだ、固より最初に中つたものは一同に馳走する約束だから、

如才は無かろが、充分君が驕つて呉れないでは不可ぜ、といへば夏山も尻馬に乗り、イヤナニ冬森君それは君の入らぬ御配慮といふものでせう、吾輩から申し込むことは無くても秋谷君に既に御心算が有るに定つたことですもの、梅は咲くなり、歌舞伎は開くなり好運の御祝の御振舞には何の御趣向でも付き次第といふ時でございます、何も論は無い一人前に十圓づゝの驕りをなされたとて多寡の知れたことですと脱れさせぬやう云ひ廻すに、秋谷は我が金を我が自由にするは我が勝手なれば君等の指揮は待たぬと踏切つて云ふことも得せず、例のにや〳〵笑

ひをして、それは勿論冬森君はじめ諸君を袖には致しませぬ、今度の日曜あたりは丁度梅も盛りでございませうから觀梅の催しでも致しませうか、と人々の機嫌を取り顔なり、下作の寅林早くもつけこみ、それは何より妙でございませう、然し觀梅も品によりけりで、ぶら〳〵と龜井戸小村井あたりを、山梔子で染めた慈姑の團子横啣へ

の、鄙簞酒の立飲の、歸路に淺草邊の天丼の夕飯の、なんと申すのは、閑靜とか風流とかいふ悲いことはござりませうが僕等俗物には有難くありませんぬ、けれど秋谷君そんなことはありますまい、但し其樣で無いにせよ、女連も無しで無法歩きの末が柳島の橋本あたりで一酌なんといふ質樸簡古主義は餘り嬉しくはありません、柳橋から船を出してといふ寸法か然らずとも淺草かけて遊廓へでも留まるといふことに願ひたひ、と云へば、夏山も春岡も子日も丑山も笑ひ出して、寅林君能く言つた君も中々隅へは置けないと云ひつゝ秋谷の面を見たり

秋谷は夢に夢見し如く千圓の金を受取りしが、妻と二人にて子無き間の覺悟と年月かゝりて貯へし金すら客易五百圓には手の届かざる位の身が急に千圓といふ大金を得たることなれば、心は流石に安堵きかねて、其日築地より吾が家への歸るさには、用心に用心して、平日に雨が降つても乘らぬ車に乘り込み、内懷に緊乎と藏めたる金を兩手で衣服の上から抑へて見たり、幾度となく手を入れて直接に握つて見たり、我が車近く磨違つて行くものを掏賊ではあるまいかと疑つて心配して見たりして、漸く吾が家へ歸りても立つたり居たり尻坐らず、何か悪事

にても爲したるものゝ人の見るを怖るゝやうに我から怯れて、妻にも見せず密に机の抽斗に此金大事と藏ひこみしが三分も經ぬ内に、取り出して坐右の書箱の抽斗に藏ひ換へ、取つ置つして氣を病ませし末は矢張内懷よりほかに懸念の無きところ無しと思ひて、寐るにも其金を懷きつゝ寐しが、無論其夜は夢に入り得で、明日は何とせん、同僚へは何とせん、扨其後は何とせんとの樣々の屈托に疲れしなるべし

其翌日秋谷は我が勤むる銀行ならぬ某の銀行に八百圓だけを預け置きて二百圓は例の内懷に藏ひつゝ出勤したりしに、其日は土曜日なりければ、愈々明日は千圓紳士秋谷先生の御饗應の看梅の宴の當日だ、左樣だ千圓紳士に招待される筈だと寅林千代田の輩先立つて騷ぎ立て、千圓紳士といふ渾名をさへ何日か付けて喚き散らし、重役の耳へ若や此一條の知れて譴責などを被るに至りはせぬかと秋谷の氣遣ひするをも構はず逼り立つるに、當惑して胡亂〳〵となりし霜六は、夏山と千代田とを小蔭に招きて、明日はそれでは梅見と極めますが、何樣か御兩君で宜敷亭主役の御助勢を願ひます、費用は打明けての御話しなれど思ひ切つたところで御一人概算五圓位までゝ

濟ませたいのが小生の望でございます、御承知の通り僕は無骨者で御耻しいが此齡になるまで亭主役を仕たことも無く、茶屋小屋で行渡りよく半間な事無しに巧く遊ぶといふことも知りませねばと赤い顏して云ひ出せしもいじらし、眞に霜六は自白の如く、これまで他との交際にて藝妓の酌で酒を飲みしこともなきにはあらねど然るときには何日も入の後についてのみ廻りて濟

ましゆくを習慣となし、自己から先に立ちては會席茶屋に一度足を入れしことも無き男なれば、夏山千代田を頼みしは秋谷に取りては智慧ありて最出來したる案じといふべし

翌日は千代田大働きに働きて元氣よく身も動かせば口も動かし、接待の下動きをなせば、夏山は我主人顏に躰能く取廻して、別に秋谷に氣も遣はせず、千代平が準備した辨松が美味の重詰に瓶詰の正宗で江東梅の園中に一寸した一ト酒宴、秋谷は此躰に安心して、アヽ夏山君も親切な、成るべく僕に冗費をさせまいと思ふて斯樣いふ態

で這つて呉るゝか、いづれ歸路には夕飯といふを名とし
て猶一席はあるとするも此の調子ならば先づ安心と私に
悅ぶに引替へて、來賓一同の腹の不平は酒の廻るにつれ
て口から洩れ、雪とも璧とも比ふべき美しき花の陰で夏
山に打向ひ、これ限りの御馳走でもあるまいが幹事にな
つた君が秋谷の妻にでもなつたやうな氣で居られては仕
樣が無いぜ、もつと奢らせても好いではないかと口說く
もあれば、千代平を捉へて、汝も根性が卑悋な奴だ、秋
谷の懷中だ、遠慮無しに藝妓でも連れゝば好いものを、
美味にしろ重詰に冷酒では承知が出來るものかと責むる

もあり、梅林の中に木兎が集まつたやうな俗物の鉢合せ
なれば口々に愚圖つくを宥むる二人も、まあ默つて居た
まへ、これから先に趣向があるのだ、何が欲しくて秋谷
の爲ばかりを思ふものかと夫相當の俗の挨拶なり。
吹く風も左まで寒くは覺えぬほどに酒も廻りたる頃其處
を引上げて、戯言を道の伽に各自ぶらり〳〵と歩みを運
びて吾妻橋にかゝり、觀音の境内に入るかとおもへば、
先に立ちて案内せる二人は萬梅といへるに突と入りたり、
忘れ歸路の近くとは云へ、御馳走も此家と相塲が極まつ
たか、夏山も頓間な奴だ、家は悪くは無いが藝妓が淺草

では嬉しく無いと、また不滿をいふもの少數はありしが、導かるゝを辭むも無く、どや〳〵と續いて入りぬ、謙遜する秋谷を正座にして大勢ずらりと坐に列れば、夏山か千代田が豫め觸れ込み置きしと見えて、多くの手間も取らすること無く頓て立派なる膳部もあらはれ、此地にしては精選と見ゆる藝妓も少からずあらはれて、羽觴は飛び絃歌は湧く賑なる態は忽現じぬ、酒は多くも飲めぬ霜六、今日は平常の會にも似ず、嬲り半分秋谷君〳〵とも てはやされ、自然酒杯も多く擬さるれば醉ひも醉ひたり、一つは我を中心にして、そやし立てらるゝに心先づ醉ひ

て、何時にも覺えぬ嬉しさを感じ、常より多く笑ひ、常より多く語り、常より心も大くなりて、常には如何なる美人に遇ひても眼にも留めず、又眼に留むるほど能く見ることをも得せざりし身が吾が傍近く周旋せる妓輩を視廻すに、不圖眼につける一人の妓の、齡は二十四か五ほどなるべく、眉は男兒らしく秀で、眼は冴々しく、口は

些大きけれど締りは好く、時々笑ふ機會に前齒と絲切齒との間の齒の齲はれたるが露るゝに不思議の愛嬌を生じて、全躰の顏は那方かと云へば劍のある方なるを全く打消して、さても愛らしきものと思はする者あり、他の妓等の大姐大姐と呼ぶにて彼等が中にての位も知るべきが、成程大姐と呼ばるゝだけに萬般かしこく取り廻して、我れを一座の長と見てか特に我がために心をつけ、癢いところに手の届く接待を仕て呉るゝに、心弱い霜六剛いものを味方に得た心地して嬉しく、醉の勢に我から心を勵まして名を問へば、お忘れなさらぬやうにと少き名刺を呉

れたるが、醉眼にも尾花屋のおすゑといふものとは讀み取れたり、一つ獻げやうと猪口をさせば、快く受けて返し呉るゝに、今まで何時の何處の宴會にでも、たま〳〵妓に猪口を與れば、御手許を拜見しませうの、そんな冷くなつた御猪口は厭ですのと大抵は刻付けられたることのみなりし秋谷に取りては詰らぬことながら心地よく、自然と談話もぽつ〳〵と此女ばかりに仕掛け、盃も度重ねて此女にばかり擬すやうになるに、妓はまた興無き談をも與あるやう取做し、酒をも機にかゝつて飲まするやう仕向くれば、愈々霜六は圖に乘りて、姐さん些燒けま

すねへ、なぞと他の妓の嬲るも心の底の底には悪からず聞えて、兎角我知らず酒量を過ごし、誰が何を云ひ居るやらも少し隔たりし處の事は耳に入らぬやうなりぬ、末座に居たる千代平は夏山に向ひて、秋谷の方を指し示しながら、何樣です、もう大抵往生らしいではありませんか、諸君に左樣云つて第二次會を開くと仕ませうといへば、夏山も笑ひながら傍に居たる妓に、汝此の盃を持つて行つてお末さんの前に居る人に遣つて呉れ、左樣して澤山強ゐつけて呉れ、さあ諸君も秋谷君を祝して一杯づゝ獻じ玉へ、それで此席は御開きと致しませう、まだ

二次會があるのですからと半は小聲、半は大聲で云へば、小聲で云ひたる二次會といふを醉つても慾耳には聞き脫さぬ衆人は、それが宜かろうよかろう、秋谷君あげます、秋谷君あげますと口々に罵りわめき、千圓紳士獻じます、富大盡いたゞきませう君にあやかるやうに、と攻め寄せたり、秋谷は飲めぬど人に逆ひ難き性分なれば、一々受けては返杯するに、幸ひお末が斟酌して注で呉れれば、左まで苦まず一應は獻酬せしが、日頃意地の好からぬ冬森寒三、平椀をとりあげて秋谷が前に出で、諸君、諸君を代表して僕がこれにて一つ飲んで秋谷君に獻しますか

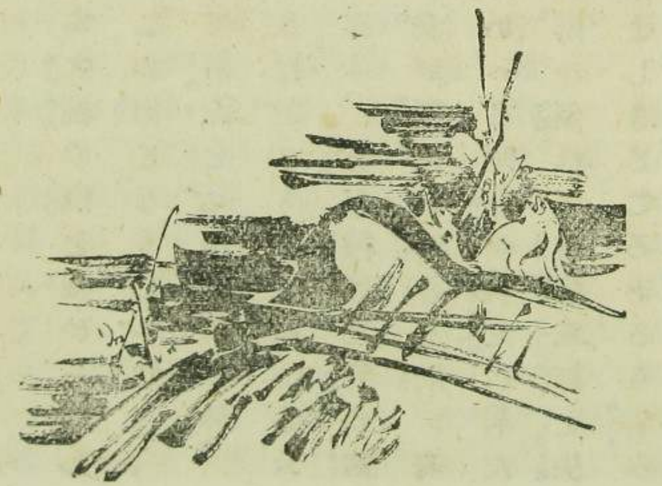
ら其時には、諸君僕と共に、秋谷君萬歳千圓紳士萬歳と御唱へ下さいと云ひつゝ、ヒヤ〳〵といふを聞捨てゝなみなみと注がせ、ぐく〳〵と飲み乾し、秋谷君萬歳千圓紳士萬歳と叫べば、大勢も一度に、秋谷君萬歳千圓紳士萬歳と叫びぬ、冬森は大酒なれば飲もしたれ、秋谷は先刻より既堪へざるまで強ひられし上、平椀をさしつけられて如何で堪ふべき、特更御酌は拙者がと寅林がなみ〳〵注ぎたるにぞ、椀を持ちたるまゝ悲しげに

酒の面を見詰むるのみ、

如何に心弱き秋谷にても今は我を強ひて此酒を飲むことを能はざるに全く究して、辭みも戻かんかと欲ひたり、されど辭まん時は過ぎて既我が手に一旦受け取りたるに愈々究して絶躰絶命、泣きさうなる色をあらはせば、子日丑山の連中は夏山冬森等が徒と共に心中には笑を含めなるべし、さあ〳〵秋谷君、飲んだり飲んだり、一同が祝して獻じた酒だ、何卒御心好く召上つてと逼り立てゝ、救はんとする氣も無し、秋谷は誰か救ひの言葉を出しても呉れなば其語に縋つて何にか爲さんと思ひ居たるに、日。

頃取分けて親くなせるといふものも無き身の今更悲しく、春岡は默つて煙草を喫し、千代田は人の後に居て面を此方に見せもせず、たゞ少し氣の毒げの顏を爲せるは五十餘りの年輩なる卯原といへる男なれど、此男は我よりも猶酒量の淺きものにて賴みたりとて助けて呉るべき樣も無ければ、詮方盡きて一ト口飲み、各位から下された御盃ゆゑ頂戴は致しましたが此上は到底僕には飲めませねば那位か御助け下されませといふに、誰一人助けんといはず、左樣云はずと君呑み玉へと冬森は免さぬ顏付す、それでも僕は呑めませぬものと涙を出さぬばかりになつて云へば、それなら一同を代表して獻じたものを御捨になるかと六かしい言葉の返辭なり、飲までは怒られん一同の氣に負かんと思ふものから無理に堪へて又一口飲めども酒は更に減ぜず、何樣しても僕は既飲めませぬと思ひ切て是非無く言ひ出すに、まあ左樣云はずと大勢が君を祝した盃だから乾して貰はんでは氣を惡くする人も無いには限らぬよと搦んで來る挨拶に霜六は今や男泣に泣かんとしけるが、先刻より默つて見て居たりしお末といへるが此時忽ち御助け申しませうと云ふかと思へば既秋谷が手より椀を取りて、息もつかずにあらかた飲み乾し

一旦秋谷が手に戻して、さあ秋谷さん、其御盃を妾に下さいまし、妾が飲んで納めて終ひませうと援けて呉るれば、意外の助を得て悦べる秋谷は有無なく言葉につきて お末にさすに、お末は受けて再度なみ〳〵注がせて見事に飲み終り、椀をば其處に伏せて仕舞ひ、さあ、これはもう濟みました、蹤は矢張小いのを流行せた方が好うございませう、寅林さん頂きませう、おや貴方が御猪口を下さる御手付は御器用だよ、屹度踊りをなさいますよ、いいえ御隠しなさつても知つてますよ、美ちゃん潮來でも御彈出しよ、小花さんが唄ひますとさ、さあ御立ちなさい、おじぶくりなさるなら妾も一處に踊りませうよ、夏山さん冬森さん春岡さん皆一處に御踊りなさいよと先に立つて踊り出して有無を云はせず立たすれば、他の妓等はぢヤん〳〵と彈き出だす、寅林等も煙に巻かれて、くる〳〵と引き廻され、譯も無く醉ひ狂ひて踊り躍ねぬ、



其下

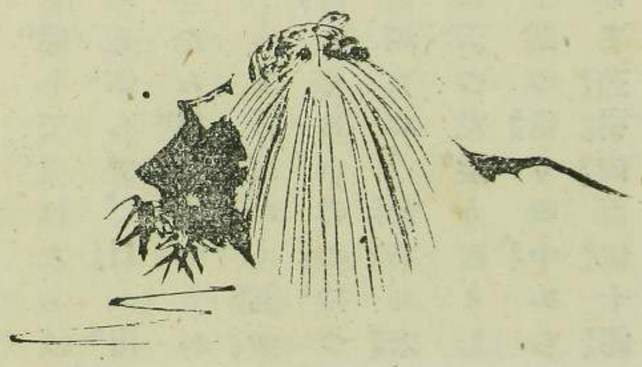
忽然として我に返れば、冬森めに大椀の酒を強ひられしまでは覺えたれど其後は何とせしか何となりしか知らず、此處は那處と力無き眼を働かして四圍を見んとする時、御眼が覺めましたか、御胸苦しうはござりませぬかと云ふものあるに、心やうやく明くなり、首を擡げて聲の起りどころを尋ねけるが、先刻に我が難儀に臨みし時、身に引受けて助けて呉れしお末といへるが我が枕元に居たるを見るより、さては我知らず醉ひ倒れて其儘正躰を失ひたりしやと悟り、身躰に猶惱ましきところあるも省み

ず起上りて、あゝ知らぬ間に思はず睡りしか衆人は何樣した、既歸つたかと眼を擦り〳〵云へば、疾に衆人樣は遊廓へでも入來つしやろうといふ御樣子で一時に御立になりましたよ、貴下は大層あがり過ごして御苦さうに御寢なつた限り身動きもなさらなければ御起し申しても御返事も無いので仕方無く此處に御寐かし申し、妾が御付添ひ申して居ました、實は段々夜も更けまするし御眼覺にならないでは此家でも困りますゆゑ時々御起し申しましたが斯樣して漸と御眼覺になつたので妾も一人殘つて居たゝけの役も濟みましたよ、何や彼は既濟んで居りま

するし、御歸宅の御車を左樣申しませう、御宅は何方でございます、此處は車が門口まで來ないので不便ですが直一ト跨ぎですから御不祥なすつてと萬般親切の取り廻しなり、美味きものゝ譬喩にさへ云ふ醉覺の水に何か知らぬど香の好い藥まで添へて貰ひ腹に染みる冷さの一ト洋盃を盡して心は稍明瞭となりたれと醉は猶殘れる霜六ちろ〳〵眼に今夜の我が救ひの神とも云はゞ云ふべきお末を見るに、年は少し更けたれど未だ盛りを過ぎし花と も見えず、愛々らしき顏にはあらねと身の仕こなしかたに何處か男を引付くる艶氣ありて、成ろうことなら何樣

か仕て見たしといふやうなる不所存も内々一寸起せしが、氣の弱き上に經驗も無ければ、他が世話して呉れたらば知らぬこと、自分からは何として好いも知らず、口へ出す言葉も生憎持合せに無く、手を握つたら怒られやうかとの懸念ばかり先立つて空しくもぢ〳〵するばかり其中車も見えたりとの嬶の知らせに、正直こくめいの心持つた身は、立ちたくも無けれど既立ちあがりぬ、此時お末がたゞ御歸りでござりますかと冷淡に云つた限りなりしならば此の小說もこれだけに終り、千圓の當りの中から同僚の饗應費何圓といふものを取除けて差引何百何十圓

といふものは無事に銀行へあづけられた限り秋谷が身の上に福が殘つただけにて濟むべきが、營業なれば、神樣の前の狛犬のやうな働きの無い男に對つても、女を怖いものゝやうに思ふて居る唐變朴に對つても挨拶に愛嬌とか世辭とか艶とかいふものを附加にして遣るが定めのことなり、まして一座の狀況にて秋谷を千圓の富にあたつた男なりとは知らぬ筈無



きお末なれば此奴生擒にして吾が食物にせんと思ひしか思はざりしか其處までは知れねど、あらもう貴郎はお立ちなさるの、最も遲いから何ですが、車が來たからとて左樣お周章ならさないでもですよ、いづれ與樣が待遠しがつて待つて居らつしやるのが御氣になるからでしやうが、あんまり現金ですよ、ねへ姐々左樣ぢやあ有りませんか散々妾に世話を燒かせて置てぷいと立つて行つてお仕舞ひなさるのは酷うございますよ、明日でも御入來になつて緩りと聘んで頂きでも仕無ければ妾があんまり埋ら無過ぎるぢやあ有りませんかと半分は嬶をとらへ半分は秋

谷をとらへてお末は喞ちぬ、常にある例なれば婢も口輕く、ほんとに姐々の云ふ通りですよ、貴郎は姐々には大變に世話を御燒かせなすつたのですよ、是非お近い中にねへ姐々、今度は姐々に貴郎が世話を燒いてお上げなさらなくては濟まない筈です、ようございますか貴郎、笑ひごとではありませんよホヽホヽと合槌を打ちて、送り出す時にもお末と共に、是非お近い中にと繰り返しぬ」其夜は事無く家に歸りて、酒に疲れたる身の譯も無く眠りしが、翌日は頭少し重きばかり、まさかに病氣といふまでにはあらねば厭々例の如く出勤しけるに、腫れ臉し

たるは我のみならす、春岡も冬森も冴えぬ顏、年若き千代田等二三人のほかは大抵同じ氣拔面にて、いや昨日は と寐惚けたやうな挨拶のみ、重役等が聞くところもあれば何事も言はず語らずに正午までは濟みぬ、晝飯終りての暫時の休憩の間に夏山千代田の二人霜六を片蔭に呼びて、君には氣の毒なことながら騎虎の勢になつて昨日の饗應は概算で君から受取つた金員よりつい超過した故其分だけは借りて來たので何樣か二人にそれだけ渡して呉れ玉へな、なに君に取つては實に僅少だ、たつた二十圓ばかりだ、一切明細な控へはこれだ、僕等に私曲の無い

ところは能く見て貰はねば幹事に推されたゞけの義務が果てぬからねと一葉の書付を出しての請求、人の悪い仕方と思はぬにはあらねど、金持つたることを知られて居るだけの弱味には澁々承知するより外に詮方無く、氣の無い眼を注いで讀むとも無しに讀めば第三次會山口巴の拂ひ何十何圓と記しあるに、我は知らぬことなれば合點行かず、これはと尋ぬれば、君も知らぬことはあるまい、あれだけの人數の治め處は他には無いから芳原へ持つて行つたのさ、君は寐て仕舞つたので置て行つたが其代りお末が受合つたから多方君の方にも次の一ト幕があつた

ろう、と笑ひながら云はれて、僕に無斷で僕の懷中を的に概算より費用の超過するも構はず其樣な事を仕たは酷いでは無いかとも詰り兼ね、ム、、濟んだことゆゑ是非は無い、それだけの金員はお渡し申しませうと、先方の云ふまゝ與へける、あれだけの事をさせながら身に染みた禮ひとつ云ふものも無きかと何程氣の好い霜六も思はざるにはあらねば誰の顏を見ても內心は面白からず、退出時間になりて皆々歸り支度する中にも

自己は一番手早く早速と家に歸らんとするに、春岡夏山の二人は急に續いて立出でつ、秋谷君〳〵と呼びかけたり、呼ばれては流石に振切つても行きかね、彼の夏山めは酷い奴と腹では恨みながら立停まれば、夏山やさしげなる調子にて、いや先程は緩りと御話も出來ないで事情の細しいところを御聞に入れることも出來なかつたが昨夜の始末も御話し仕度し、且は君に大層な散財を掛けた其御禮といふには足らないが春岡君も同じ考なので二人で君を招待して、ほんの晩餐だけ上げたいのだが何樣か承引して呉れ玉へ、といふ尾について春岡も、別に急ぎ

の御用事も無いならば何樣か是から直御一所にと至つて慇懃の挨拶なり、夏山ばかりの云ふことならば辭みもすべきが春岡までが言葉を添へてのことなれば、好ましとも思はねど、それは千萬ありがたし、左樣まで爲さるゝには當らぬながら折角の御思召なれば御言葉に甘へて、と云へば滿足の色を面に浮めて、忽ち車を夏山は命じ、三臺勢ひ好く行き着きしは淺草なり、昨日と同じ家にて別にこれといふ興も無き代りには、意地悪く苦めんとするものも無く、苦められもせで至極平穏に飲み居たりしが、酒半酣は及んで、春岡笑ひながら、男ばかりでも淋

しい、誰か招ばうかと輕く云へば、左樣さ、それだけは秋谷君に遣つて貰つても可ろう、ねへ秋谷君と如才無く云ふ時、昨夕の婢口を出して、貴郎お末さんだけは是非お招聘にならなくつては義理が惡うございますよと秋谷の顏を見つゝ云ひぬ、懷中に金はあり、昨夕の念はまだ消えず、一座の機會はかくの如し、夏山は兎に角、春岡に馳走のみさせて濟してのみ居るも一寸出來難き場合なる上、酒に幾千か心は大くなりたれば、宜しい、お末と外に二人ばかり奇麗なのを呼べと云ひ出せば、頓てお末を先頭にしてお辨おちやらなといふが來りぬ、云ふまで

も無くお末はまづ、能く入來しつて下すつたことゝいふやうな極り文句を秋谷に對つて云ひしなるべきが、此日此夜春岡が所爲か夏山が所爲か但しはお末が機關にかけてか、三人は奥山の某の待合に入りしやあらずや、乃至は草津の温泉にでも浴りしやあらずや、何かは知らず各自が家には歸らざりし、

最初に籤に中りし時、吾が女房へ打明て話せしならば好かりしなるべきに、女房のおたよといへるは、親が警部を勤め居れる登戸牛雄とて名からして頑固らしき堅藏が手に育ちたるものとて、富に中りしなどゝ云はば、中り

し手柄は措いて何で其樣な悪いことをなされましたと煙たいことを云ふは必定と、隱し置きて知らせざりしなれば、斯樣なつては愈々明かされず、通勤は怠らねど其翌日も我家へは歸らず、淺草へ行きしが、流石に今夜は外で明かしては氣が咎めて、更けて吾家へ歸り見るに、洋燈明るき下に居ずまひ正しく何か知らぬど裁縫をなし居れり、歸りしを見て、我顏を讀まんとてか、お歸りなさいましと云ひながら此方を見し眼は平常ならざりしが、別に問ひ糺しもせざるに胸を安めて直に眠り、明けての朝は出勤時間より些早かりしも何と無く家に居辛きがた

めそこ〳〵に銀行へと立出たり三度四度は春岡夏山と共に一つ穴に潜る貉同士なれば打連れ立ちて遊びしが、貴郎、あのお二方は御朋輩でせうが何時も貴郎に負つて御遊びなさるのは酷いぢやありませんか、見たところ餘り貴郎に親切な方でも無し、御腹の中は大方遊び德といふ料簡で着て廻るのに違ひはありませんから其積りで棄て御

仕舞ひなさい、斯樣して無益の立つことばかりをなさろうよりも穢くとも妾の家へ御來臨なさいな、悠なことをいふと御思ひなさるか知りませぬが妾はほんとに貴郎のことを思ふから云ふのですよと或夜ひそかにお末に智慧を入れられてより、天晴忠義もの、嬉しい心立を持つて居て呉れるものと充分お末に卷かれたる代り、春岡をも夏山をも卷いて捨てゝ、其後はちよこ〳〵尾花屋といふ御神燈の下を潛つては逢引しけるが、此樣なれば夏山も春岡も向ふ顏に廻つて、多森寅林等が居る前にて、秋谷君は頃日奇麗になつたの、いや痔が見えるの、それも其筈

大した女に可愛がられ過ぎるからのと嫉み半分忌々しさ半分に嬲りかくれば、勤め向に辛いことは無けれど顏を持つて行くのが厭氣にもなり、出勤時間に些外れゝば、今までは駈足にしても馳せつけしものが、また今頃出て行かば、おそい〳〵判官殿尾花御前が傍にばかりこびりついて居らるゝ故其通りなぞと嘲弄さるゝは知れた事、仕方が無い、いつそ病氣屆けを仕て眞實の病氣に取繕はんと、病氣ならぬ病氣も爲るやうになり、一日休めば翌日は猶出辛く、自然今までの精勤の習慣を我から碎して仕舞へば、時には、これでは濟まぬと思ひ返しても容易

十日とは續かず、心は安きを失ふて酒のみ何時か強くなりぬ、

銀行にての噂高ければ女房の何時までも知らであるべき譯無く、無盡に當りたるもお末とかいふ女に關係の出來しも過ぎたことなれば是非なけれど、此頃のやうに全然家へも歸らず又勤め向も不精勤といふやうでは眼前は兎も角も末に好いことはござりますまい、第一折角無盡で取れた財貨も悪錢身につかずの譬喩の通り消えましせうにと或夜久しぶりにて家に寐し時女房は懇々と意見せしに、其場では何も彼も乃公が悪かつたと眞に後悔したら

しき顔色せしも明る夜は矢張家に歸らず、朽木に鉋、糠に釘、斯樣では無かつた人なるにと、やきもきして異見の度を重ぬれば大人しくばかりは聞て居ず、そゝ五月蠅い、知つて居る、それほどの事は知つて居るが汝が思ふよりはお末が乃公を思つて呉れるほうか餘程深い、冗費を少もさせやうでは無く、美味いものを食はせて面白く機嫌を取つて呉れるが、汝は何だ、女だてらに出過ぎた説法、そのくせ碌な菜一つ食はしても呉れず、亭主が自分の氣に入るやうに仕て呉れゝば好いと思ふか知らぬが、亭主は女房の家來では無い、汝の注文通りにばかりなつ

て居られるものか默つて居よと罵りし、末は止める袂を拂つて尾花家へと駈け去ることも度々あるやうになり行きたり、霜六が言葉も虛妄ならず、お末は眞實に霜六が爲をおもふが如くにて、何一つ霜六に請求もせず、默つて居つて霜六から呉るゝものだけを貰ふばかり、萬般親切に振舞へば、今は長火鉢の向ふに坐つて柄に無い幕を出し居る霜六、高くも無い鼻を大得意に聳かさせて急拵への通人となり、お末が何かを直して呉れたる絹物のねんこを着て情人がるも無理ならず、其中一日いと眞面目に、疾から貴郎に機會があつたら御話し申さうと思つて居ま

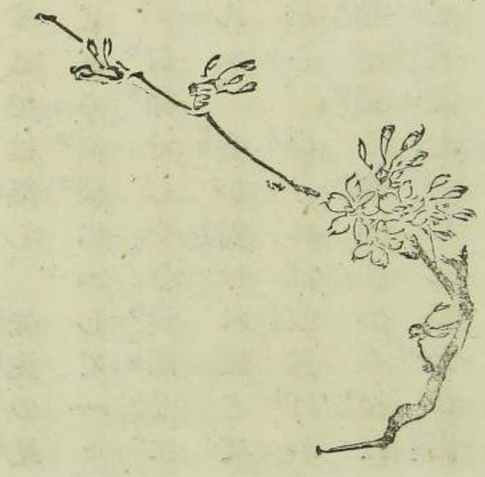
したが丁度巧い口が湧いて來たので御話仕ますから能く聞て而して何とか考へて下さい、ほかでも無いが吾家の營業、此處で斯樣やつて行く日には困りも仕ませんが餘りも仕ないで、善惡とも無しで濟むといふ面白くも無い事ですから、かね〳〵妾も行末の案じをつけて居りましたが、此の營業も自分一人で妾のやうに遣つて行つては出來したことも仕得ませねど、藝よりは面の世の中ゆゑ容貌の好いのを四五人も置て種の好い客のある土地で遣つて行けば、隨分好い財寶の掬へるのは知れた譯ですよ、それで私も何樣か左樣いふ運びに仕度いものと心掛

けて居たところへ丁度芳町に居て同じ營業を仕て居ます私の朋輩が今度お芽出度い譯になつて御赤飯を配る仕誼になり、家屋ぐるみ二人の妓をつけて望み人もあれば讓りたいといふのです、云ひ價も可なり安い方だし、それに妾が買はうといへば幾千か負けて呉れるも知れたこと、場所は彼地なら客の種も隨分好い方でございますし、屹度妾が骨さへ折れば一ト流行流行らせて一年内に大丈夫資本は取つて仕舞ひますが、それにしても先立つはお金のこと、九百圓ばかりは何樣しても要るです、ところが妾は此の通り、何處へ便つて出して貰はうといふ處も無

し、ナァニ爲ずとも濟むことですから仕無いとおもへばそれまでゞすが、危險いことをするでは無し、先途の見えて居ることですから成ろうことなら何樣にかして一ト目釜起したいのでございますよ、何樣でしやう貴郎妾に一つ遣らせて見ては下さいませんか、妾が儲ければとて妾のものは畢竟貴郎のものですから、好ければ共に好かろうし、悪かつたにしろ資本は物で殘る譯ですから損は無い筈、能く考へて見て下さいと言葉を巧にして云ひ出しぬ、

九百圓には前に中りし富の金に我が從前の貯金までを添

へねば既足らざれば、霜六も急には答へかねしが、充分お末をば信じたれば、否〳〵、乃公は左様した金を出すことは出來ずとは云ひ切りかね、且は此事巧く運べば我がために悪からぬことなりと慾からの算盤に心も傾き、遂に芳町に藝妓屋を開かせてお末が腕一杯に働かせ見るに及びけるが、流石はお末が云ひ出して爲せしことだけお末は鋭く抜目無く采を取りておてこおしなの二人



の妓を安直專門に駈けあるかせ、二月三月めよりはあぐりかぐりといへる二人の半玉も置き、附木の燃ゆるやうに勢ひ好く流行せ、幾千か利益を見るに至りぬ、

慾と色とに満足を得て霜六は此上無く面白き月日を送り居けるが、面白からぬは女房の身にて巣守は好けれど日に増し邪見にあしらはるゝに堪忍ならず、媒妁人の土川物右衛門といへるが許に或夜駈け込み、出て行けと云はれても出やうとは存じませんだが、全然家には歸らぬばかりか勤めの方も疎略にする樣子に今日も今日とてしみじみ異見を申しますれば汝の知つたことでは無い、銀行

を假令ば失策つても乃公は女が食はせて呉れる、其時になつたら汝も愚圖〳〵云ふた女に食はせて貰ふやうなことになろうも知れぬほどに餘り乃公が餘所に泊つたとても文句を云はぬが好いと、斯樣いふことを申しまする、餘り情無い貝人の心、あゝでは迚も行末の見とめが付きませぬば、兒も無し、妾は斷念をつけました、と泣きながらの言分に無理は無し、それでは丸々男が惡い、けれども時の機にかゝつて云過しもあるは誰しも、事、秋谷は左程無法なことをいふやうな氣質の男では無い、秋谷の料簡を篤と糺して其上で何とかするが順と物右衞門自

身秋谷を訪ふて樣子を見るに家は空家も同然にて、家財に眼ぼしきものも見えず、扨はこれもおたよの云ひし通り、何も彼も一寸したものは皆尾花屋へ持つて行きしといふも虛誕ならず、と第一に驚きしが下婢ばかりにて用は足りず、是非無く尾屋花へ尋ね行けば往時の霜六とは暫時見ぬ間に變りて、乙に澄ました顏つきをかしく、言葉も何日か下卑た調子になつて、二言と云はぬ間に古代物の物右衞門は愛想をつかし、亭主に斷り無く駈け出すやうな女に用は無へ、離緣までのことゝの無法な言葉に、貴公のやうに腐つた男に其儀ならば此方でも添はして置

けぬと散々に腹立ちの餘りの毒口をきゝて歸りしが、頓ておたよは親元の警部が方に戻るに至りぬ、

銀行に勤めは猶怠らぬつもりにはあれど居る場所も場所柄なれば自然惰弱の身持になりて勤務もおろそかになり勝になりて、霜六、重役にも睨まるゝに至りしかば冬森春岡等が陰口も力をなして一日突然免職となりぬ、さて免職となりて見れば、免職さればとて女が食はして呉れると誇りし霜六も、些弱らざるにはあらず、されどお末も慰めこそすれ免職になりたればとて厭な顔もせざれば少しはこれに心強く、一日又一日と爲すことも無く鼻糞を穿るか煙草を呑むかして暮し居けるが、何日と無くお末は霜六に向ひて、貴郎引窓の紐が斷れましたから一寸屋根へ上つて附け直して下さいなといふこともあれば、あゝ大變な恐しい雲が出て來た、お三は居ないし困つて仕舞ふ、一寸二三杯水を汲んで置て下さいなといふこともあるやうになり、先には下駄の後が少し減れば、香取屋、六文屋から自身見立てゝ好い品を買て來て呉れしが、近來は、あゝもう下駄が穿け無くなつたと云へば、三十錢ばかりをころりと出して、これで好きなのを買つて入らつしやい、日光下駄が好うございますよといふやうに

なりぬ、それも少時して今度は貴郎と呼んで居たを何日の間にか汝といひ換へ、二階に二つ並べし床をお三に云ひつけて自己は抱へのおてこおしなの間に挾まつて寐るやうに敷き、霜六が床は下の奥まりたる貳疊の小座敷、しかも雪隱の傍近きところに敷かせ換へ、使ひは云ふに及ばず、あらゆる凡てのことに、立つてるものは親でも使へといへる金言を楯にして、霜六を使ひぬ、口惜しけれども詮術無ければおめ〳〵として月日を送りしが、朝から晩までごろ〳〵して居ずと些は御錢を取ることを心がけたら可かろうに犬もあるけば棒にあたると

云ひますよ、家の用を濟ませたら世間の怜悧な人達のところでも廻つて好い口を御認けなさるが好い、朋友なんといふものは此樣いふ時の爲ですよ、何處でも行つて御覽なさい、なんですとへ、手土産を持つて行きたいとへ、洒落臭いことを云つたもんです、土産なぞ持つて行くのは人躰が違ひますよ、御世辭を巧く遣へばそれが無いものゝ遣ひものですはね、人に物を賴むに玄關から大手を振つて行くやうな寐物けた料簡ではいけない、左樣いふことをするには汝の器量では推が強い、と何を云つても取り上げず、たゞ追ひ出す算段なり、

冬森は意地悪ければとて訪はず、春岡を訪へば奥に聲は仕ながら不在と當り障らず追拂はれ、虎林を訪へば、御全盛で御羨ましい、僕なぞは例の通り薄給な身、君は尾花屋の旦那樣か、耳朶の善惡で斯樣も違ふものかねと却て此方を上げに上げて口を開かせず、仕方無く空腹を抱へて歸つて來れば、ヂロリと見たまゝ言葉も掛けて呉れず、お三は飯前と聞て膳拵へなし、坐敷に持ち出づればお末は癇聲、其方へ持つてお出よ、わからないねへ、坐敷へ持つて來ずと好いのだよ、臺所で好いのだよ、食べさせるだけがまだ慈悲なのだよと口の足りるところへ手

つきまでを添へて彼方へ〳〵と叱り退くれば、あはれや霜六は臺所で食はさるゝに至りしが、それでも生命あれば食はずには居られず、竈の陰でくしやり〳〵、

頼母しき人々には妻を出せし時より見放され、朋友等は富に中りし時より同情を表して呉れず、お末には終に追ひ出されて、右と左と違つた下駄を穿き、袖からも裾からも荒布のやうなものを垂れて、今だに芳町あたりを野等犬のやうに行く男あり、あれが千圓紳士の果なりとて評判〳〵、

將棋

人の心は動いて止まらざるものなれば、靜ならねばならぬぞとは能く諦めた無理なことなり。されど動くに任せては、小人閑居して飲みたくなり、三人寄つて三分亡くなす智慧を出すをまぬがれず。そこを見透して馬鹿な兒を持たれた聖人が第一番に碁といふものを工夫し出し、これ三太郎や一寸來な毎日〳〵良からぬことして遊ばうより爺が面白い事を敎へて遣ろうほどに智慧があるなら試みよ、と四ツ目殺しの法ぐらゐを手ほどきにして、それより段々、こうやらしちやうやらせきやらと六ッかしいはむづかしいだけに面白いことを吹き込まれければ、三太郎大きに面白がりて、今までの惡業をいつとなく忘れたやうに廢めて仕舞ひ、おとつさん一番鬪ひませう、もう昨夜のやうな手には乘せられませぬぞと二十五目風鈴つきで食つてかゝれば、このごろのやうに凝られてはこれはまた藥が高じて玩物喪志、ちと毒になるやうな氣遣ひも出て來た、と頭を搔きながら相手になるといふ始末にて月日を過ごしけるが、これがため三太郎一生は後の代の烏のやうな歷史家にほじり出さるゝほどの惡事も

爲さず、たゞ少し足らなかつたろうといふだけが傳へられて濟みけるよし。桀だの紂だのいふ男も碁なりと知つて居つたらば盤に對つて居る間でも人の命の五つ六つは助かつて飛んだ隱德になるべきに、ふびんやな五目ならべも知らなかつたと見えて酒池肉林などゝ下らぬ遊びを仕た末があたら身代を棒に振つて仕舞ふたとなれど、また一説には桀紂ともに碁は殊の外强かりしが賭碁を多く打ちしより心いらひどく慈悲無くなりて遂に天狗道に扯き入れられ、さてこそ殘忍不德の振舞重なり天下を亡ふに至りしとあり。いづれにしても正道に碁の樂みに遊ば

ざりしより大難に臨みしに至りしものと見ゆ。吾邦の將棋は何人の工夫し出せしものか詳ならねど、理屈はいづれ碁に同じく、人心の安動を制し人欲の途輙無きを治めて八十一格の盤上に八萬四千の煩惱を封じ込むるを本來の大作用とはなすなり。されば雨の日のまめやかなる雪の夜の靜かなる折ふしなど二人對座して勝負の機に肝膽を碎き先手後手に思案の底をはたく時は、食ひ氣も無くなりて菓子皿の羊羹より心搆への田樂ざしに秘藏の香車を摘み居る、相手は澁茶の冷ゆるを忘れて握りし桂より烟りを立たするといふありさま、風流といふも餘りあり。

爾時二人の心中にはたゞ四十の馬子おのれ〳〵の神威を振ひ能事を逞くして或は睨み或は搏ち、或は飛躍し奔突し、或は忽然として變化しつ蛟龍畢に池中のものにあらざるを示し、或は悠然として自ら衞り羽翼既に成りぬと誇るもあり、紛々片々として蓮花の天より墮ち神將の雲衢に馳驅するが如きを觀るのみ。戸外を美人が通ればとて出て見やうとも思はねば情婦から文が來たればとて条の平内が蚊にさゝれたやうにもおもはず。よしや十千萬兩今儲からずとも歩一つあれかし宗桂も御氣のつかれぬ妙手をあらはして此の將棋に勝たうものをと取引先から

來た電報も傍へ置いたまゝで封をきらず。極樂も願はず地獄も避けず、名利安養の浮世のいさくさは悉皆からりと棄てゝ仕舞ふて、蚤に咬れても瞋恚を起さで關はずに居る襟懷は王猛に比して一段ゆたかに、火の消えた煙管を其儘啣へ居る趣きは無絃の琴を撫するより可笑味まされりと云ふべきか。此の堺界の樂しさは卑き慾の滿足なんどを得たる樂しさなんどゝは日を同くして語るべきものにはあらずと云ひつべし。

睡氣さゝぬ時念佛を申されよと尊き僧は敎へ、用事仕果てゝ後付合ひせんこと然るべしと良き師は評せりとかや。

人誰か職務無からん、職務を濟まさで戰はば將棋には勝つても風流の罪はまぬかれじ。

盤も假物なり馬子も假物なり、畢竟は心と心との爭ひなり。實際の戰爭よりは遙に抽象的の戰爭なり。盤則馬法等は存すれども實は全く純抽象的の爭ひなり。確實なる智の一の作用の勝劣の爭ひなり。玉突の如く手腕の如何の算入せらるべき遊戯にはあらず。甲者と乙者との間に差異あること無きや否やとの疑ひあるを免れざる人工的物品を勝負の一の要素として成り立つ遊戯にはあらず。即ち玉突競弓の如きものにはあらず。天運即ち人の智慮

の及び難きものゝ如何の算入せられて勝負の決せらるべき如き不精確のものにはあらず。即ち彼の花合せ骨牌双六等の如く一半は智慮に及ばざるところあるが如くして勝負の決せらるゝ不精確のものにあらず。腕力、權力、想像力、器世間力等の擯入することを毫も容さゞる遊戯なり。純く一の意思に協はすべき思惟の精確なると精確ならざるとに由つて勝負の決せらるべき至高至純の遊戯なり。碁、チエッスと同じく恐らくは遊戯中にて最も高尚なるものなるべし。たゞ憾むらくは思惟の學問の不健康なるが如く思惟の遊戯なるが故に不健康なるを免れず

して、また全くの游戯なるが故に或は時に交際の一助たることのほかは副産物として吾人を利益するの點これ無きことなり。

碁と將棋と孰が趣味深かるべきやと問ふは恰も琴と三絃と孰が面白かるべきやと問ふ如く甚だ愚なる質問にして將棋に於て深き趣味を解せる人は將棋を趣味深しといふべく碁の趣味を深く解せる人は碁を面白しといふべし。

但し趣味の性質は必ず大同小異なるべきが比較して之を說かんとは難事に屬することなれども將棋をも碁をも能くするものならでは之を云ひ難からん。或士

の碁の趣味は寛にして長く將棋の趣味は烈にして深しと云へるは如何のものにや。

將棋と碁と手數は孰が多きやとの問も能く人の發するところなれど、これまた容易に決する能すざることなるべし、看壽といふ將棋家此問に對して工夫し出せし由に云ひ傳ふる詰手は六百手に餘りて終に敵をして脫する能はざらしむ、予頃日之を演し試みしが、半途に至らずして眼花神昏たゝ瞠若として自失するのみ。

暑中休暇は來らんとす、風通しよき小亭に主客對坐して閑に韜略を戰はし、やまとの神仙はかうしたものと勝負

を爭ふもまた妙ならずや。

わが失敗

去る午の歳の病後のことなりき、弱り果てたる身を疾く舊の態に復らしめんがため日に少しづゝの運動をなすべしと思ひ立ちはせしものゝ、愚なる男の他の遺せし物にても拾はんとするが如く、事も無きに眼なれたる吾が家近きあたりをあるかんも興無しなど慮りたる末、程よく身を勞すべき細工事して自ら慰めんと心をきはめぬ、さて何をか吾が業として執るべきぞと考ふるに、やゝ做し

得べしとおもはるゝことは運動せんといふの目的にさへ協はず、好く目的に添へることは容易に做し得べしとも おもはれねば、少時は思ひ迷ひしが、我が目的にさへ協ふべきことならば足るべし、做すことの成らざるはさまで憾みとすべきにもあらずと悟りて、小き箱をつくり煙草盆をつくりなどする簡易なる木工の業を我が日課とすべく擇び定めたり。事の成らざるは憾みとせじとは思へるものゝ、爲して成らざるは口惜からぬにはあらねば、心の底にはひそかに、我必ず箱を作り出さん煙草盆を造り出さん、書物入るゝ箱をも文机をも作り出さんと多く

の望みを懷き、且つ其望みを空の中の雲の如く消え果てはせしめざらんとの弱からぬ念を燃しぬ。

されど其業に就きては其當時悟得せしことのあるにもあらざるのみならず經驗をなせしことすら全く無かりしなれば、たゞ鋸をもて木を截り鉋をもて削り釘をもて綴ぢんには小き箱は成るべきなりといふのみの事のほかは知らぬなりし。さるに自ら木工業者たらんとせしは、闇の夜には盲人の眼ある人より却て大膽なるが如く、難易の程も知れぬ境には無智識無經驗の者の却て多少の智識あり經驗ある人よりも大膽なるの理にて、我はあはれにも

大膽に、大膽にもまたあはれなりしと云ふべきのみ。

かくて無智識無經驗の與えたる膽力に誇り亢ぶれる我は寺島より淺草に出でゝ、鋸を購ひ鐵尺を購ひ、揚々として家に歸りしが、其の折の心の中には云ひも得ざる愉快をのみ充てたり。其は云ふまでも無く無智識無經驗の二人が伴ひ來りたる空想といへる者の餓れる物なり。

槌、鉋の類は家に藏せるが有りしかば、取り出でゝ其塵埃を去り、先づ鉋を撿むるに少し鏽は被たれど刃は幸にして缺け損じ居らず、菜刀など磨がんために備へられたる砥石を引出してこれを磨ぐに、頓て刃の裏表とも光り

輝きて鋭げに見え渡りければ試みに紙片竹葉など截つに露礙はりなく截ち得たり。器械は皆とゝのひぬ、いざや先づ手初めに小箱造り出ださんと、有り合はせたる板をとりいでゝ勢よく削りかけしに、心地よく板の刃を迎へて削らるゝ音してくる〳〵と巻きたる鉋屑の風の扇りに飛んで墜つるかと思ひのほか、がつちと音して鉋は板の一端に緊乎と咬着きしまゝ、曳けども〳〵更に動かず。こは過つたり、我が腕に熟錬の勢といふものなければ、かくありつらめと再び鉋を持ちあらためて此度は前より猶ひとしほ力を込めて曳けど同じく思ふにも似で削り得

ず、刃の出で過ぎたるがためかとて刃を少し後へ退かしめて削れば、あだに板の上をば辷るのみ、仕損じては仕替へ、仕替へては仕損じ、終に其日は削り得ず、力疲れて面白からず止みぬ。

初日の失敗は左まで我が心を沮ましめず、次の日は徐に功を成さんと籌りて一時間餘りも鉋を磨ぎしに、其利きことは濡れ紙を截つをも難しとせざるに至りぬ。かゝれば今は仕損ずることあるべからずと板に臨みて削り試みしに昨日と同じ失敗の繰り返されしばかりにて何等の效をも見る能はず、其日も同じく不快に止みぬ。

二日の失敗は我が心を沮ましめざるにはあらねば、三日めは流石にまた鉋を磨がん勇氣も無く、木工業を中止して、單に本來の目的に協はしめんための所行として淺草あたりを散歩しけるに、ある家の修繕普請をなせる大工の易げに板を削り居りしが眼に留まりて、歸る道すがらは昨日一昨日の失敗を如何にして明日にも明後日にも拭ひ去り得べき歟との考へにのみ思ひ入りぬ。

砥石の水平ならぬは鉋を磨ぎて成功せざる所以なるべしと思ひ得ければ、次の日は沓ぬぎの平めなる石にて先づ砥石を平かにせんと試みけるが、こは極めて短き時間に

て目的を達し得たり、些細の事にはあれどこれに心勇みて、此度は必ず成功せんと徐に例の鉋を磨ぎて日を暮し、其次の日も午後の四時頃より磨ぎ初めて夕に到りぬ、思ひ做しにや前には鋭さを加へたるやうなれば明日は恐らく快く削ることを得べしと樂みを抱きて止みし其明る日、十分の自信をもちて例の板に臨みしに、兎角の論なく直ちにまた吾が親友とも云ふべき失敗といふ者の來訪に遇ひしかば、鉋を投げ捨てゝ綾瀬の方に逍遙し、それより二週間ばかりのほどは、心に其事あらぬにはあらねど、身は其事に關らず、或は庭を掃ひ或は魚を釣り又は例の

散束などして日を過ごしけり

一日散歩の次に一工人の鉋を磨ぎ居れるを認めしかば猶豫無く趨つて就き見るに、彼は吾が家にては剃身を磨ぐためとして備へある砥の類の砥にて急がず滯らず磨ぎ居り、其傍には既に用ひられたりと見ゆる砥の横たへ捨てられたるが、其は全く我が熟知せるものと同じものなりし、これにて白き砥もて磨ぎし後猶緻密なる質の砥もて磨ぐべきことを曉りしかば家に歸りて例の鉋を磨ぎけるに、此度は鐵の色もいよ〳〵澄み透りて秋の水の知くなりしにぞ、かくてこそと早くも心に三分の悅びを含みし

が、其悅びは束の間に失せて例の親友にまた訪れたり。

次の日某といふ男來りて雜談に時を移せし末我試みに鉋は如何にせば能く物を削り得べきやと問ひけるに、鉋の刃は少し圓みを帶びたるが好しとの答へを得ければ、直に其說に從ひしが、其結果は前來の結果に比して優るところ無かりし

其後幾日か過ぎて年老いたる人の我を訪へるがありしに、年老いたる人なれば思ふに長き歲月の間に積み蓄へ得たる豐富なる經驗の中にかゝる事もありしならんとひそかに推して問ひしに、そは能くも知らねど鉋は臺木により

て好くも悪くも働くものと聞けり、左ほど磨ぎ玉ひしならば刃に鈍きことはあるまじ、臺木を吟味し玉ふ方よからん、たゞし我は鉋といふもの手にしたる事も無きほどのものなれば精きことは告げ得ずと云ひぬ、こは眞に理あることにて臺木の悪からんには刃の板に觸るゝ邊の平均を得べからざる筈にて、從つて使用に阻碍を來すべきいはれありと思ひて、其後吾が鉋の臺木を定規にて檢るに甚だ不規則なる凸凹を寛やかに做し居れるを認めたり、此の爲にこそ無益の勞をなしつれと思ふものから急に水平面ならしめんと企てぬ、されど他に鉋無ければ水平面

を得べき方なく、少時考へ得ざりしが、愚にも鮫やすり、木賊、乃至は金剛砂布を用ふるか、さらずば砥石の類を用ひてと案じ出したり

此時他に新に一つの鉋を購ひ求めんと思はざりしにはあらざりしが、此の現在せる鉋をさへ用ひ得ずして終るほどならんには又他の鉋を購ひたりとも遲速はあれ其鉋を用ふる能はざること猶今の如き時に遭遇することあるべきなれば、其は今日の難きを來日に委ぬるの計と云ふべく、拙きを掩ふの手段にかしこきと同時に拙きを保つの手段にも賢きものと嘲みてもあるべきことなり、されば

成功は難くとも遲くとも現在せる此鉋を用ひ得るに至るまでは新に購はずしてあるべし、此鉋を用ひ得るに至りて後新に購ふべきに定まらば其時購ふべし、又此鉋の質の悪きならで、此鉋を用ひ得ざるに定まる程ならば、箱作ることも煙草盆造ることも、爲して成し得べきもあらぬ我なり、自ら慚ぢて此小木工業者たらんとの望みを抑ふべし、但し、此鉋を用ひ得ざるに定まりたりとは何の日に我自ら謂はん、はた人誰か敢て言ひ得ん、と頑固にも執拗にも自ら思ひかへして、新しきを求めんとは終になさで、鮫やすり木賊の類を購ひ、心を勤めて寛くして

捗らぬ業を試み初めたり

多くの日を費して臺木を水平面に改め得は仕たれど、木を削り試むるに及びて、折角苦心して得たる結果は、例の親友を招待するの準備として設けたる茶菓に過ぎざりしことを知り、我は泣かんばかりに力を落しぬ

其後は運動すべく定めたる時間を他の事にのみ費して口惜き鉋を見もかへらで過ぎしが、年やゝ長けたる某を訪ひし時、此事を語り出で、見て易げなる事も爲しては難きものなりなど云ひければ、某は笑つて、我が聞けることあり、鉋は、裏の斷るゝと云ひて、其道に習はぬ人の

長く用ひたるものは、大抵裏刃の刃口知らぬ間に中凹くなり、砥の面に密着せざるやうなり居れる故如何ほど礪ぎても削ること能はざる由なり、我に一挺の鉋あり、君に貸し與ふべし、此は嘗て露店にて購ひしなるが、此鉋を購ひし時、家を出づるに前だちて、其當時家隣りに住み居し大工に、今夜鉋を購ひ來らんと思へるなるが、鉋は誰の作か優れたると問ひしに、誰の作にても火に燒けたるものならずば刃あるものゝ切り得ぬは無し、たゞ裏のきれ居ぬを購ひ來り玉へと敎へ呉れしにて知り居れり、我も戯れに小細工することは好めば敎へられし如く裏の

きれざるを購ひて直に用ひ試みしに、足下の失敗の如き失敗を得けるまゝ、怫然として敎へしものを責めけるが、敎へし者は笑ひながら、是は臺の悪きなりとて吾が鉋の臺を二三度削りし後我に回し與へ呉れたり、久しく用ひざれば今は知らず今までは快く削り得たり、足下持ち歸りて用ひ試み玉へと心輕き好き人なれば我に其鉋を貸し呉れたり、これに失ひたる勇氣を再び得て心嬉しく家に歸り、吾が鉋を撿むれば、果して裏のきれ居りて、水平なるものゝ上に刃を觸れしめ透し視れば中央の部は全く物に觸れざる程なり、さてこそ失敗の根本はこれなりけ

めと先づ悅びて、急に砥石を引出し來り、高き部を礪ぎ減さんと勤めける

昨日も磨ぎ今日も磨ぎて、日々怠らず腕の萎ゆるまでつ磨ぎしが、遂には全く倦み果つるに至りても猶我が思ふごとくには磨ぎ成し得ず、興味無く、且つ變化なき此勞働には精も魂も流石に盡き果てゝ、ある日は齒を切つて自ら忍びつゝ礪ぎは仕ながらも、我から我が愚なることに力を勞するを嘲り罵り非難冷笑する心起り來りて堪ふる能はざるに至りしこともありしが、自ら我を壓して忍ぶやうになりての後は左まで長く忍ぶこと叶はず、末

には自ら廢するに至りたり

同じ寺島に住める文士某翁を訪ひし折の事なりし、我が愚しき實際を打明かしては語らざりしも、單に刃物を研ぐことの難きよしを云ひ出して我知らず喞ちしに翁も心輕き好き人なれば、されば、人の性分といふべきか天稟といふべきか別に木片拾ひを仕たる覺えありといふにもあらで一寸研ぐにも直に能くきるゝやう研ぎなし得る人あり、また盃などの器具を日常拭くにも不思議に或人の拭きたるは末には漆にても塗りたるやう光澤を發し或人の拭きたるは汚れ居らずといふまでにて光澤を發せ

ず、俗にきれ手かや手といふもあながち云ひ消し難くして然る事もあるやうなりと眞率に語り出でゝ、後は餘談に入りたり、まことに然る事もありぬべし、吾が祖母は所謂つや手にて吾が家の他の者等のつや手ならぬも現證なれば、我は自ら我が所謂きれ手ならぬ男歟とひそかに我を疎みおもふを免かれざるに至りぬ、其時は最初に紙片竹葉を截り得、折の自負の滿足の影の胸に浮びたるに任せて、我は恐らくは所謂きれ手の方なるべしとは口走りしなれど

身は漸く舊に復るを得ければ、勤めて運動をなすべき必要も無くなりしと、興味なき勞働を引續きて爲さんことの厭はしきと、他の種々の事に紛るゝとより、何時と無く、さしも熱心に爲せし鉋なぶりも忘られし如く止みて其年は暮れぬ

翌年春の初芝に居を移せしが、近くに西洋家具を製作する工人の住へるが多きより、出入毎に我が寺島にて一度起せし念はまた燃やされて、五月頃より其念は我を驅りて吾が手に彼の遺恨ある同じ鉋を握るゝに至らしめぬ、同じ樣なる種々の失敗は記すも懶きまで繰り返されぬ、種種の人によりて說かれたる種々の敎へは、確實に其一半

をもて我を將來の成功に近づかしめ、其一半をもて我を現在の失望に居らしめたりし、かくして我は今や單に鉋に就ては殆ど成功を見んとするに至れり、されど我は猶一の小箱をも一の柳形の煙草盆をも造る能はず、そは云ふまでも無く、鋸、錐、鐵鎚、罫引等のものに就て失敗を重ねざればなり、噫鉋にすら月日を經る是の如し、書棚、文机を造り得るに至らんは抑々何の日の事にかあらん、遠い哉〳〵

藤

空を凌いで立つ老松の男らしさに
身を寄せて風が誘へど鳥がなぶれど
靜かに咲ける藤の花野にさまよへる
詩人は虹の消えのこるを打興じ
谷に住へる僧は紫雲のたなひけるやと
おもひやる錦繡萬片散や一時の
櫻の意地は無けれども綠波千疊
織る三春の柳の媚はうらやまず

よはくこそあれ　あはれかよはき　うつくしさには
山賤も　斧ふりあくる　手をばとゞめて
今日とは松を　ゆるすちん

僧の戀

名をいとふ戀につかれて力なく
うつふして見つ起きて見つ
ひちをもたする小つくゑの
まゑはつかしき人目たけ
花に昨の日の水かれて

香爐に灰も冷たまゝ
けむるは胸の中ばかり
あへぬつらさに見たいのは
たのむほとけの御經より
おもふをんなの色まゐる

蝸牛庵鬼語

春の夜のいと靜にして瓶中の花かすかに匂ふ時、我がほかに人無くして然も聲あり、心を專にしてこれを、聽くに曰く

燕は鳥の至つて小なるものなり、されど其飛ぶや千里の遠きに過ぐ、詩人不幸にして小なるものと他に謂はれんか、又果して小なるものなりと自ら覺らんか、造化は卿に燕を示せり、煙る柳の梢を掠めて飛び飜へる燕の聲の喃々たるを聞くあらば卿自ら聊か慰むに足らん

蟻は蟲の至つて微なるものなり、されど其苦行の善果は三冬の淋しき日にあたつて蟋蟀の徒に誇るに足るなり、詩人不幸にして微なるものと他に云はれんか、又自らまことに微なりと覺らんか、造化は卿に蟻を示せり、俯して庭前の蟻を見よ、蠢々として動くもの恐らくは卿を勵

ますならん

世を擧つて詩人を知らざらむか、詩人は幸にして詩人たりしなり、幸にして詩人たりし卿は深山に美しく咲き出でゝ人に知られず散る花の如何に多きかを想ひ見よ、おのれの人に知られざる時、詩人ならずば、恐らくは卑き恨と憫むべき慍とに堪へざらむも、幸にして卿は詩人たり、太古より今に至るまで今より最終に至るまでの深山の花を想ひ得て明らかならんには、試みに卿自ら問へ、花は人に知られざるを恨みて其芳香を噴くことを怠りしことありしやあらずや、慍りて怠るべきかあらぬか、請

ふ試みに仔細に問へ、想ひ得て實に明らならば世ばなれし山の奥に咲きて一點の塵も蒙らざるゆかしき花の幽香は必ず卿の胸に薫ぜん、而して幽香の薫ずるは卿の恨と惱とを拭ふが如くに解き去るべし

蕓薹の油は其種子しめ木にかけられて初めて出で、玫瑰の精は其花らんびきに逢ふて後に成るなり、世は詩人を酷く待ち冷かに遇することもあるべし、されど幸にして詩人たる卿は其を微笑もて甘受し得べし、幸にして卿の有せる美しき想は卿をして今こそ我は搾木にかけられつゝあれ、らんびきに逢ひつゝあれ、我は蕓薹の種子なれば、我は玫瑰の花なれば、と思はしむるだけの力あり百舌鳥は自ら飛び行きて樹の最も高き枝に止まる鳥なり、されど自ら飛び行かで同じ高さに到るものあり、其翼に巣くへる微蟲なり、其國の詩の歴史が成せる勢力にのみ依りて高き處に到らんと思ふことあらば、卿は百舌鳥の翼に寓せる名も無き微蟲とならんとせるなり、卿よ聞け低き枝にある藪鶯の聲とゝのはぬにもをかしき節はあるものなるを

詩人よ卿の一字の師たるべきも卿の同志の友たらざるものは、草に埋れたる古き井を古昔の都の跡に尋ねて其處

に家つくれと勸むるの人なり、卿の師にも友にもあらざるものは今は燒野となりたるところに瓦の缺けたるものと柱楹の焚え殘りたるものとを拾ひて綴ぢ集めて家つくらんとするの人なり、卿を慫慂て草なく木なき沙漠のたゞ中に井を鑿らせんとするものあらん、其は人にあらず氣のみ昂りたる跛馬なり、卿の前路には卿の行を無益なりとして遏めんとするの關守あらん、卿は其關守と爭ふなきも可なり、其は無益有益の二言よりほか解せざる關守の壽の菌の如く短くして終るべければなり、又姪女の美目好笑をもて卿を流連せしめんとするものあるべし、

其は世の榮華を挿頭にせる力の極めて强き魔なり、卿は其女に執られたる袖を斷つを惜むことあるべからず、而して猶卿は際涯無き曠野に迷ふことあらん、迷ふとも行け、騫直に行け、卿仆れて死すとも卿の枯骨は卿の子孫の爲によき途の標たるべし、日に晒さるゝの骨は地に埋めらるゝの魂よりは甲斐あるべし

詩人よ、不幸にして卿は盲人の杖に撲たるゝことあるべし、其杖ひそかに毒を以て塗られたりと見ば其盲人を殺すも可なり、されど幸にして詩人たる卿は彼を殺さんよりは、彼の盲人の揮ふ杖の何物をも撲たざることの如何

に多きかを想ひ見よ、恐らくは卿は劔を按せんとするの前に飯を噴せんとするならん、人の碁を圍み局に對するに當て傍より喋々助言ずるものあり、憐むべき其類の助言者は閭巷の間に相嚙み相鬪ふ黃犬黑狗の援兵たるに適するのみ、詩人も不幸にして狗の援兵たるに適するのみの者に或は嗾せられ或は叱せらるゝことあるべし、されど卿は幸に喜怒することなかれ、尾を振ると牙を露すとの醜は卿の演ずるに忍びざるところならん

鷲は天の高きに翔けりて双眸の裏に幾十里の山河丘谷の位置形勢を納るゝものなり、蚯蚓は地の卑きに居て少許

の泥土を呑吐するものなり、詩人よ、鷲若し地圖を作りたらんには見よ、卿の路を行くに益あらん、雨後の軟土上に蚯蚓の自ら描きたる者を見て以て地圖となす勿れ、卿は精細に蚯蚓か描ける圖を檢するとも畢竟はたゞ彼が自ら描きたる怪き圖の一端に彼が遺骸の横はるを見んのみ」こゝに忽然として聲は滅しぬ、鬼語にやあらん鬼語にやあらん

駈ある記

塵埃紛々たる銀坐通りにも春色溢れて柳の風に舞ふ姿さ

へなまめき渡り、小娘の頭に挿頭の櫻の花やゝ多く見ゆるやうになれば、可惜好い天氣の日曜を机の傍でのみ暮すといふことあるべからず、出玉へ〳〵、僕は寫眞機を携へて趣味ある眺めに出合つたらパチリピシヤンとシヤッターを用ひて撮影すほどに君は出來事の興ある節もあらば筆に仕玉へ、太郎右衛門が檐には桃紅に、次郎作が背戸には李白く、小社の側の椿の花、麥圃の間の菜の花といふように花づくめの天地、那處へ行くとも面白からぬことはあるまじ、此度の日曜には必ず御誘引申しますから出かけ玉へとの乙羽庵が勸めに、元來長閑氣宗の宗

徒にさるものありと自ら誇り居る予なれば後へは退かず、心得たりと答へけるが、永き日も經つて見れば疾く、忽ち約束の其朝となりぬ。天の色、鳥の聲、いづれか春ならぬは無き無類の好き日和なれど、時節か時節だけに詩の本文通り曉を覺えず眠り過して九時頃漸く朝の食を爲し居たる折しも、これも眠過したるらしき乙羽庵は寫眞機一具を携へて洋服姿の甲斐〳〵しげに打扮しつ訪ひ來りければ、さらばとて此方は一瓢をぶらつかせて躍り出し、兎に角に新橋へと足を向けしが、停車場に着きて見れば下りの瀛車は既出し後にて猶四十分も待たざれば横

濱行きは無しとなり。毎度馴れたることなれば忌々しくも思はねど、今少し疾く來たらんには川崎邊へまで行きて、それより多摩川畔を上らんものをと間の抜けし時出るは愚痴のみ、別に良き分別も無きまゝ怜悧らしき顔して待合室に居たり立つたりなし居けるが赤羽行きの車の頓て出づるといふに、さらば其車にて目黒の方に行きて見ん、もとより川崎と限りたることも無ければと急に飛び乘りて譯も無く目黒に着きぬ。停車場を出でゝ少し不動堂の方へと歩むに甘藷先生の墓これよりと道しるべせる石立てり。我等聊か恩を受けたる心地すればなど戯れ

ながら道より右の方へ入りて見るに、碑は小高きところに在りて、取出で云ふべきところも無きものなれば、況して寫眞などにはすべくもあらず。二人共に興醒めて其處より直ちに不動堂の裏に抜けしが、不動堂も人の知る如く然まで撮影したきものにもあらず。樹がくれの鐘樓龍の口より落つる瀧、さては經藏二王門も或は妙ならず、或は日光の工合悪く、或は見限の巧く付かねば技師は手を空しくして坂を下り、予も啣へ煙管で總門を出でぬ、門前の茶屋〳〵が店頭に立ちて口々に客を招く女どもの頭を光らせ面を白くせるも、まさかに撮影し難く、ただ

徒に筍飯の美を思ひてや技師先づ内田といへるに入り込み、實は今朝晏起してと可笑しき腹の中の消息を洩しけるも罪無きことなりし。晝には猶間あれど此處より先は然るべきところも無ければ共に充分に腹ごしらへをして、いざとて立出でしが池上の方へと行くこと長からずして摩耶尊これより二丁と記したる石あるに、甘藷先生にも猶懲りず、何にせよ此樣いふところへ入つて見て人も餘り知らないやうな面白い景色を見出さなくては妙といふ譯には行かない、まるで詰らぬところで歩行損としても二丁の往復で濟むことと技師を勸めて横に折れしに、二

丁行き三町行き四町も行きたれど、それぞと思はるゝものにも會はず、技師は豫てより那處其處へ行かうといふ決定した目的無くて歩く我等には迷ふといふことも無しと說き居たりしも、如是なりては餘り面白からず、左樣〳〵は長閑氣にもあり得ずして人にさへ逢へば摩耶尊へは此路を行きて可きか悪きかと問ふやうになりぬ、行くこと頁久くして終に佛母山摩耶寺といふを得たりしが、見つきの一寸好き割合には是また撮影すに好き點少なく、全く徒勞となりければ、本意無く池上の方へと行くに、予は手にせるもの瓢簞一つのほかには何も持たざれど技

師が肩より懸けて持てる器械の一箱は二貫目の上は慥にあり、日は温煦にして重ね小袖に羽織にては些汗ばむを免かれぬほどなり、醉ひてはならずと心したりし目黒の小酌も幾分の四肢惓怠を增すには力あるなるべく、これにて二人とも大に弱りたるに搗て加へて路は變化無く興味無く、器械を組み立てゝ覗いて見やうといふ處などは藥に仕度も無ければ、ほと〳〵辟易して似而非勇氣を皷しての冗談の聲も漸く途切勝となり行きけるが、適々若きと中年との二人の男の何やらを荷にしたる車を聯ねて挽き行くものあり。予は技師が重荷負ひたるを先刻より

氣の毒に思ひ居ければ、幸のことなり君其荷だけを車の荷の小附を仕て貰ひ玉へと賢しら立ちて勸むるに、肩も相應に痛くなりたる技師一も二も無く同じて、オイ〳〵此車は那處まで行く、ム、丸子の渡しの方へか、丁度好い、それなら汝の帆待になるだけの事は爲るから此を附けて行つて呉れと頼みて答も待たず既器械の入りたる箱を車の上に打載せつ、ほつと息を吐きしは敏捷かりしが、不圖心づきて熟く視れば、平めなる籠に山盛にして筵も掩ひある車上の荷は、是は抑如何に、其往古何某禪師は此品の乾きたるをもて芋を煨きしとか聞えたれど凡夫

の我等より觀ては嬉しからぬ肥料用の物なり。勸めし予も應ぜし技師も呼とばかり少し萎みしが、通といふ言葉はかゝる時人を慰むるに非常の力あるものとて、汝一句予一句どうも通だ、實に此邊が通といふものさと互に無理壓に通の一語を以て其光景を讃せしは苦しくもまた可笑かりし。されど眸中の天地相も變らず平々凡々たるには愈々面白からぬ感のみ高まりて、少々は待つても彼の次の瀛車で川崎の方へ行きしならば此樣もあるまいものを、ア、急がずばとは古い奴が巧いことを云つたものだなぞと腹の中に下らぬ愬を湧しつゝ歩みけるが、池上村

字道々橋といふ處にて車挽ける男の一寸休んで參りませうといふに是非無く我等も一服と腰を休めにかゝりし途端、道の右手に家列の欠けたるところありて其處に例の何やらの標の石の立ちたる態其奥には寺ならずば宮にても有るべく思はるゝが見えしかば、試みに趨りて其處に到り見るに、忽然として眼界新まり、ばら〳〵と立ちたる樹の間より和かなる春の日に照らされて漾々たる水の面も一ト入美しく凪ぎ渡りたる大きなる池の見えたり。今日初ての好き眺めを見出し得たることゝて占たり〳〵と叫びながら猶進み行きて見るに、出島樣になりたる地

の樹木好きほどに生ひたるが中に寂ては見えざれど庵あり。人に尋ね問へば御松庵とて日蓮上人が毒龍を濟度せし故跡と云ふ。池を洗足の池と云ふも由ある名なるべし。大士袈裟掛の松今は枯れたれど竈の下にも入れられず伐りたるまゝに存されたり。故事は兎に角に遙隔ちたる對ひの岸の出張りたるところに八幡の祠の鳥居の水際近く立ちたる、また其左りの方の地勢彎曲して水の流れ河の末かなんどを見る如く奥深げに入り込みて見ゆるなど中中に無味なる圖續きを朝より見し眼には風情あり。悪き後は好きもの、先づ〳〵店を開くべしと技師も勢つきて、

疲勞は全く忘れ果てつ、急に車より器械を取下し、二枚此處にて撮影したり。これより心に張の出で來て、多摩川縁に出でなば猶好きところもあるべしなど語り合ひつゝ丸子指して行きけるに下沼部といふ地にて小流に架せる「けゑちやう橋」といへるを過ぎる因に左手の方を見れば、里童等七八人流れに横はりたる小舟に乘りたるあり川中に立てるあり岸に立てるありて何事とも無く遊び戯れ居たり。予が眼にも可笑と思はざりしにはあらざりしも、たゞ是小說の添へ景物と見過しけるに技師は流石にたゞは通らず、好題目ござんなれと器械を取出して撮

影さんと試むる折しも自ら寫眞中の人たらんと柄の長き鍬を持ちて其を洗はんと流れに下り立ちたる農夫あり、流に傍ひたる路を柴負ふて行過ぎまくする少年あり、益興ある材の鬻集たるに、暫時の間ぞ、其儘〳〵と彼等に聲かけて制しつゝ首尾好くバチリと寫したるは出來上るべき圖のみならず其事もまたいと興ありし。かくて程無く丸子の渡船場に出しが、いつもながら玉川の清き流れ見る眼の塵も洗ふばかりなるも、此邊はたゞ茫々と濶く平かなるのみにて川手前の上の方に淺間の祠の續きの丘あるほかには眼に障るものも無ければ、此處と定めて

指すべき方も無し。此眺望に手を空くすべきにはあらねど如何はせんと技師も予も水の面を見居けるに河中の淺き瀬に立ちて蚊釣といふものもて懐中刀ほどの大さなる若鮎を釣れる男あり、又岸近く引寄せられたる老船あり、川原の四本鉤の鐵錨あり。これらを取合はさばとの技師が考へに、酔興にも予は大多力をもつて錨を船の艫に移し、船の中は水入り居りて足踝を沒すべく見ゆるまゝ船縁に蹲み居て再び水晶鏡の中の人となりぬ。此處より川原傳ひに矢口まで行き得べしとの事に水邊こそ猶好きところもあるべけれと逶迤屈折て川添を行き、鵜の木の光

明寺を遙に左の方に見て、彼をと語り合ひしが上越す景の前途にあるべしとおもふより其儘に過ぎ、下平間の渡しも何時か後にし、矢口の渡し近く進みしに、堤と川との間に小草の菌なして白き傘を假の日除とし、川下の方へ向ひて眞景を描せる若き油畫師あり。其同伴と見えたる二人も彼是同じ程の年齡なるが、是は既描き終へしと見へて坐せる傍の草の上には畫の一二枚あり、此の邊河は面白く彎り流れて麥の綠なる菜の花の黃金色なる、遠く見ゆる棒の樹楢の樹の連なり續きたるが涯は霞と一つになりたる、姿こそ見えね、那處にて歟ぎゝぎゝころ

〳〵と雲雀のはや啼くなど、取出でゝ云ふべき奇も無けれど眞に田舍の春の態を代表すとも云ふべき景なれば、畫家の擇みしも流石は理ありと思ひつゝ會釋して其前を過ぎりつ。行くこと幾千ならずして、繫り船一つある其手前の汀に夫婦とおぼしき農の午勞を洗ひ居れるあり。芋洗ふ女西行ならば歌よまんといへるも思ひ合されて可笑く、午勞洗ふ男女を乙羽なりければ忽ち撮影したり。矢口には一箇所位はと樂みにしたる甲斐も無く、到りつきて見れば新田の祠は燒後新に成りしものなれば、神社には似合はしからぬ煉瓦と漆喰の腹合せの玉垣も口惜く、

艶消し硝子に鐵の棒など見えたる本社も片腹痛く、詮方なければ是は攔きて池上の方へと心ざし進むに春の日なれど漸暮近くなりて、本門寺の森を眼遠に望む頃には夕陽の光り黄ばみ來りて餘光幾干も無からんとす。此邊にて今一枚と技師油斷無く見廻しつゝ行くに、路の側に石の塔あり。何かの供養に用ゐたる率塔婆一二本を入れ置けるものも其傍近くありて、村童の遊び居れるも時に取りて風情を添えたり。是をと早速黒き布を被ぎて技師の覗き居る最中に背後の方より、是も村の者なるべし十四五の女の兒の風呂敷包みを袖にして來りしが有りしかば、

これを生擒りてと、立たすべき位置を見計らひ置きつゝ予は例の調子好き愛嬌ある聲にて、小姐〳〵、ちよいと此處へ來て立つて居て呉れぬかと呼び掛けしに、其聲は銅鑼の如く聞え、其態は攫んで食ひさうにでも見えしにや但しは須磨に流離ひし昔の雲客にも優りたる殿御と予を見て羞かしがりしか、面にさつと紅色を潮して脚速に元來し方に引返し逃げ行きて再び來らざりしは氣の毒にもまた可笑かりし。日もいよ〳〵落ちかゝりたれば是を打止めにして本門寺に詣りしが、技師は疲れに疲れて一段一字の例の坂を上るに臨みては千鳥がけに攀づるやう

なりたりければ五重塔の傍より抜けて松葉館といへるに至り、ほつと息して疲勞を休めぬ。此家は高みに寄りて搆へ成したれば大森の海も眼下に見えて吹き來る風も心地快く、一浴して縁に立てば衣を千仞の岡に振ふと洒落ても可き思ひあり。二人とも此地まで來たれば既家に歸りたるも同じ事とおもふまゝ心を寛くし、一日の可笑かりし事ども語りては笑ひ、笑ひては瓢簞の中ならぬを酌みて陶然となり、頓て汽車一ト飛十時といふに都に歸りしが、汽車を待つ間停車場前にて戯に買ひし大森鬘の野郎頭なるを技師は冠り島田髷なるを予は戴きなどして笑

ひ合ひしを畫間なりせば那處かの技師に撮影されたらんも知るべからず、思へば危きことなりし、人を咀はゞ穴二つの本文もありしにと舌を出して穴賢〳〵。

僥倖……廿九年二月作
將棊……廿八年三月作
蝸牛庵鬼語……廿九年三月作
駈ある記……廿九年四月作

明治三十年一月三日印刷
明治三十年一月六日發行

僥倖
定價金八錢

編輯兼發行者　大橋新太郎　日本橋區本町三丁目八番地
印刷者　愛敬利世　牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　株式會社秀英舍工場　牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地
發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

版權所有

袖珍小說

毎月三回發行

正價 一冊金八錢六冊前金四拾八錢○十二冊金八拾錢○郵税各四錢

小說の出版日に月に盛んに、我邦文運の隆昌、古來未だ曾て今日の如きはあらず。本館偶々感ずる所あり、茲に世の名流巨匠の筆に成り、所謂金聲玉振なるもの、其想は俊邁奇拔、其文は瑰麗雄大、實に文界の偉觀たるに背ゝ、美術大家の新意匠に成り、明窓淨几の下、紳士淑女の好伴侶たるべく、船に、車に、山に伴ひ、水に伴ひ、旅嚢革囊の珍たるべく又時に世相を觀て文章を習ふ徒をして、精讀沈思藉て以て餘師あらしむ。江湖諸君請ふ陸續愛讀を賜はらんことを

- 第一編 つり的 全 饗庭篁村作
- 第二編 間髮 讀 森田思軒譯
- 第三編 僥倖 幸田露伴作
- 第四編 彫像師 切 内田不知庵譯

第五編以下は逐次詳告すべし

幸田露伴君新作　富岡永洗彩色畫

全一冊　洋裝大判
正價　金三拾錢
郵税　六錢

ひげ男

附録　靄護精舍雜筆

思想文章雙備を以て、今の文豪と許さるゝ露伴子の傑作着想例に依て天外より落ち、筆々奇警雄拔、讀み來つて無限の趣味あり、御愛讀あらんことを請ふ。

故樋口一葉女史著

一葉全集

全一冊

四百六十頁洋裝大判木版彩色密畫入
正價金四拾錢
郵稅八錢

本書目次

十夜　わかれ
行く雲　経つもり
や机　大月月
大夜　闇月
玉り　五月
五櫻　うつれ
月雨　ゐ
霜木　夜霜

花ぐもり
雪の音
そろそろと
うつせみ
軒もる月
うらむらさき
にごり江
あきぐれ
たけくらべ

以上二十二書合本

故若松賤子女史譯述

小公子

全一冊　洋裝大判
正價　金三拾五錢
郵稅　八錢

若松賤子女史肖像（アートタイプ）及松井昇氏畫（寫眞銅版）挿入

故若松賤子女史が、邦文學を代表するものとして、世の公評ある「小公子」の全篇は今やこれを世に公にするに至れり。特に其後篇は、久しく讀者社會の渴望せしものにして、今日始めて、世上に顯はるゝものなり。

佛國ジュールヴェルス氏原著
森田思軒君譯述

十五少年

全一冊洋裝大判
寫眞鉛版畫入
正價金三拾錢
郵稅八錢

小山正太郎君畫

英國重要の殖民地ニユーヲランドの首府、クイランドなる、チエマン學校の生徒十五名、暑中休暇を利用して、一隻の兩檣船スロー號に搭じ沿岸遍航に出でたるに、風濤の爲めに吹き流され、絶島に漂着し具さに千辛萬苦を嘗め、滿二年の後漸く滊船グラフトン號の救ふ所となり、故郷に歸ると云ふ大冒險小説なり。事既に奇にして文之に稱ふ、思軒君が譯文中傑作の一なるべし。

文學士鹽井雨江君
文學士武島羽衣君
文學士大町桂月君
合作

美文韻文 花紅葉

全一冊總クロース
金字入袖珍美本
正價金三拾錢
郵稅六錢

春花秋葉は天の文、人間亦美文辭なかるべけんや。鹽井雨江、武島羽衣、大町桂月三文學士の文名、夙に江湖に騷ぐ。今其錦心繡腸、吐いて美文となり、發して韻文となれるもの、凡そ數十篇、集つて此冊子にあり。才華爛發、紙上珠を聯ね、地に擲たば金石の聲を發せんとす。洵に花紅葉を一時に看るの心地すべく、明治文壇の奇觀たること、言を待たず。天下文を好むの士、願くは一本を備へて、讀誦に資せられよ。

博文館發行脚本小說

福地櫻癡作 ◉日蓮記 全一冊 正價八錢 郵稅六錢
〃 ◉大久保彥左衞門 全一冊 正價二拾錢 郵稅四錢
〃 ◉尊王美談 平野次郎 全一冊 正價拾五錢 郵稅四錢
〃 ◉女楠 全一冊 正價拾五錢 郵稅四錢
〃 ◉十二時會誓曾我 全一冊 正價八錢 郵稅四錢
〃 ◉東鑑拜賀卷 全一冊 正價四錢 郵稅四錢
〃 ◉關ヶ原譽凱歌 全一冊 正價八錢 郵稅四錢
山田美妙作 ◉村上義光錦旗風 全一冊 正價二拾五錢 郵稅六錢

博文館發行講談小說

三遊亭圓朝演 ◉名人長二 全一冊 正價二拾錢 郵稅六錢
〃 ◉蛾夷なまり 全一冊 正價二拾五錢 郵稅六錢
〃 ◉政談月の鏡 全一冊 正價拾五錢 郵稅四錢
〃 ◉八景隅田川 全一冊 正價二拾錢 郵稅四錢
桃川燕林演 ◉佐倉宗五郎 全一冊 正價二拾五錢 郵稅六錢
放牛舍桃林演 ◉天下の糸平 全一冊 正價二拾五錢 郵稅六錢